

I S S N 2 7 6 0 - 3 6 5 2

紀 要

第57卷

2025

独立行政法人国立高等専門学校機構

鈴鹿工業高等専門学校

独立行政法人国立高等専門学校機構

鈴鹿工業高等専門学校紀要

第57巻

目 次

スマートフォンから入力できる公欠申請システムの開発

—Microsoft Forms と Excel による申請書の作成—

..... 平林 義彦, 内藤 司, 伊藤 健一郎, 青山 俊弘..... 1

芥川龍之介「或阿呆の一生」論

—作家としての〈告白〉—

..... 石谷 春樹..... 7

CONTENTS

Development of a Public Absence Application System that can be Entered from a Smartphone - Prepare Applications Using Microsoft Forms and Excel –Yoshihiko HIRABAYASHI, Tsukasa NAITO, Kenichiro ITO, Toshihiro AOYAMA.....	1
On Ryunosuke Akutagawa's "A Fool's Life": A Confession as a Writer - Nudge Reminders for Overdue Books Using Microsoft Teams -Haruki ISHITANI.....	7

スマートフォンから入力できる公欠申請システムの開発 —Microsoft FormsとExcelによる申請書の作成—

平林 義彦^{1*}, 内藤 司², 伊藤 健一郎¹, 青山 俊弘³

1: 学生課

2: 教育研究支援センター

3: 電子情報工学科

鈴鹿工業高等専門学校では、学生が授業を欠席扱いとはしない取扱い（公欠）を願う場合、学生自身が公欠願の申請を紙面で行う必要がある。この申請方法は、公欠の事由等によって記入項目が異なり間違いやすいこと、手書きであるため文字が読み取れない場合があるなど、教務負荷が大きくなる問題がある。そこで、手書きの代わりに Microsoft Forms と Excel によって公欠願を作成するシステムを開発した。本稿ではシステムを概説し効果と課題について考察する。

Key Words : 教務, 電子申請, Microsoft Forms, ワークフロー, DX

(受付日 2024 年 11 月 6 日 ; 受理日 2024 年 3 月 6 日)

1. 緒言

大学や高等専門学校等の教育機関では、学生の公的事由等（忌引き、感染症、交通機関の事故、就職試験など）による欠席について、授業を欠席扱いとはしない公認欠席（以下、公欠）と言われる制度がある。

鈴鹿工業高等専門学校（以下、鈴鹿高専）においては、学生から申請された「公欠願」に基づき、規則で定められた取扱い基準によって「公欠」の適用を判断している。

従来、鈴鹿高専では学生が「公欠願」の規定様式用紙（以下、用紙）を学生課の窓口で受け取り、紙面に手書きで記入した後に提出する流れであった。この手書きの問題点として、学生に記入方法を都度説明しなければならないこと、提出された後に記入の間違えを目視で確認することが必要であるなどがあげられる。これら問題の要因は、公欠の事由等によって記入が必須となる項目が異なり、学生にとっては記入が難しいと考えられる。また、手書きのため記入されている文字が読み取れないこともある。このような状況であった 2023 年度は、「公欠願」の申請が年間約 2,800 件あり、学生課での教務作業が大きな負担であった。公欠申請の機能がある市販の教務システムを導入している鈴鹿医療科学大学^{1,2}などの事例はある。しかしながら、鈴鹿高専が更新予定の 30 校以上の高専が導入する教務システム³では公欠申請の機能は無く、同様な状況下である他校でも手書きの問題点は懸念される。そこで、喫緊に対応すべく公欠申請が可能な

システムを内製することにした。

鈴鹿高専の学生と教職員は、Microsoft 365 を日常的に使用している。そのため、筆者たちは、「公欠願」の入力に Forms を使用し、印刷用のファイルを出力する処理に Excel を使用したシステムを開発した。本稿ではシステムを概説し、効果と今後の DX (Digital Transformation)⁴ を念頭においた課題について考察する。

2. 方法

2.1. 手書き記入から Forms 入力への変更

「公欠願」の手書き記入と Forms 入力についての手順を図 1 に示す。申請者である学生の行動は、用紙を受け取った後に記入するか、先に入力してから用紙を受け取るかの違いがある。Forms 入力の場合は、申請日は自動入力としたため、用紙を受け取る以前の日付になる。

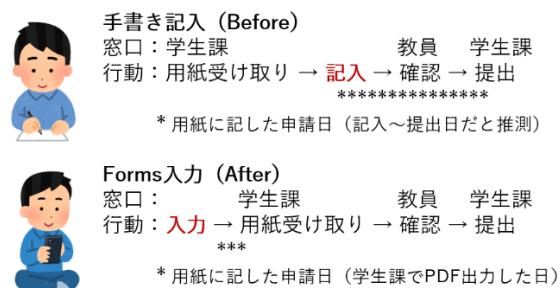


図1 手書き記入とForms入力の手順

教員の確認を電子承認に、学生課への提出を電子データに変更できれば、紙を使用しない電子申請システムの実現を検討できる。しかし、システムが複雑化し容易に内製することは困難である。そこで、2024年度については、従来どおり紙を使用したシステムとして検討した。また、用紙への印刷についても学生の利便性を考えて、従来どおり学生課で印刷することにした。

2.2. Forms と Excel を用いたシステム

鈴鹿高専の図書館業務では、図書館における返却遅れを減らすことを目的として、延滞図書督促をするために、Teams のチャットと Forms を連携したシステムを2022年度に作成した。チャットで延滞者に連絡し、Forms にて延滞図書の返却予定などを回答してもらう方法を採用している。スマートフォンを利用すると、最短で3タップで回答できるなど、全学生が携帯端末を持っている時代に即した督促方法である⁵。

熊本高等専門学校八代キャンパス（以下、熊本高専八代）では、COVID-19 が流行したことをきっかけに、学生が自ら健康状態を Forms で申告し、点呼としても使える情報システムが開発されている⁶。このシステムでは、Forms の回答を Excel ファイルへ追記させることができ

る仕組みを利用している。

鈴鹿高専や熊本高専八代での短期間にシステムを内製して、学校業務を改善した事例から、Teams との連携と、Power Automate を使うことなく Forms と Excel の連携による回答の追記を参考にした。連携方法は、公欠願用の Teams チャンネル（以下、チャンネル）に Excel のファイルを保存する。この Excel ファイルを開けると Web 版の Excel が起動し、「挿入」タブの中から、「Forms」を選択し「新しいフォーム」にて、Forms のフォームを作ることができる。作成したフォームは、作成元となった Excel ファイルと連携され、Forms の回答が自動的に追記される。この方法は、システム障害などで Power Automate が動かない場合でも、Forms が正常動作であれば、回答は欠落せずに保存が可能である。

図2に、公欠申請システムの全体構成を示す。一連の処理の中で、「公欠願 PDF 出力」と示されたマクロ機能が有効なブック（Excel の.xlsm 形式ファイル）を用いている箇所は、先行事例には無い独自のアイデアである。マクロ機能を使うことにより、チャンネルにある Excel ファイルに追記された Forms の回答を読み取り、データ変換後、PDF 形式のファイル出力やデータ転記までの処理である図2で示す①～④の処理が行える。

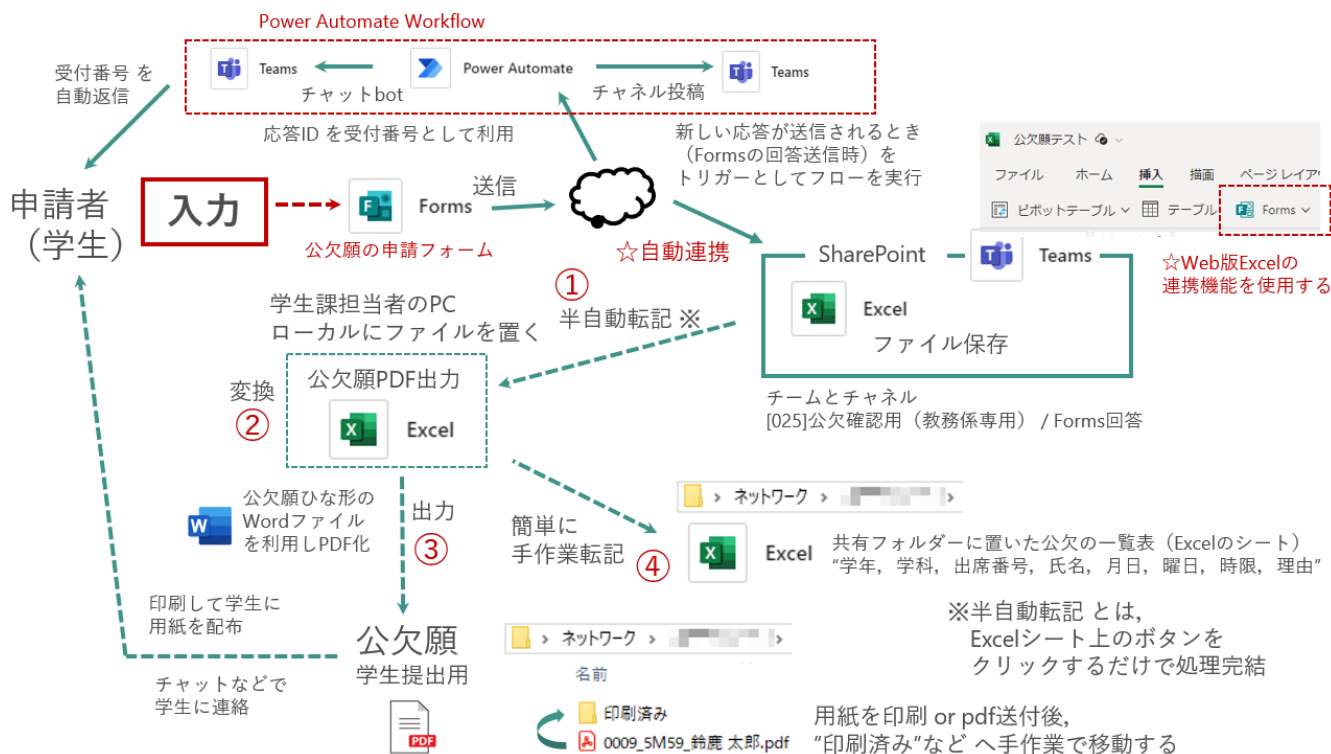


図2 公欠申請システムの全体構成

2.3. フォームの作成と Power Automate

図3に、「公欠願」の入力用に Forms にて作成したフォームを示す。選択肢や日付（カレンダー機能あり）などを使い簡単に入力できるように工夫した。また、分岐の機能を使い、次の設問が変わるようにした。たとえば、本科の学科名を選べば学年は、1年から5年までの選択肢となり、専攻名を選ぶと1年か2年の選択肢になる。また、公欠の事由が就職試験であれば、行先や試験日の入力が必要となることで入力漏れの防止をした。ただし、Forms の入力規制機能は限られているため、公欠日の期間を指定する入力規制を行うことができないなどの制約はある。

Forms での回答送信を行うと、学生へは Teams チャットで自動返信メッセージ（図4）、学生課担当への通知として、チャンネルへ自動投稿メッセージ（図5）の処理が自動的に実行されるように、Teams の Workflow アプリで Power Automate の機能を使用する設定をした。なお、各メッセージの受付番号は、Forms の回答送信ごとに連番が自動採番される「応答 ID」を利用し、ゼロ埋めの4桁数値で表示する。

図3 公欠願の申請フォーム

図4 学生への自動返信メッセージ例

図5 チャンネルへの自動投稿メッセージ例

2.4. 公欠願の PDF 出力

次に、チャンネルに保存されている Excel ファイルからデータを読み取り、PDF 形式のファイルを出力する処理について述べる。デスクトップ版の Excel を用いて、VBA（Visual Basic for Applications）でプログラム作成し自動処理を行う。

図6と図7に、Excel シートのスクリーンショットを示す。Excel シート上のボタンをマウスでクリックすることで、図2の中で示された①～④の各処理がボタンごとのプログラムにより実行される。①は Excel ファイルからデータを読み取る。②以降は選択した行のデータ処理である。②はデータ変換処理とエラーの自動検出を行い③にて PDF 出力する。④は一覧表ファイルへ転記するためクリップボードにデータをコピーする。

図6 データ読み取りの Excel シート

図7 データ変換後の Excel シート

3. システムの運用結果

3.1. 職員の申請受付（教務作業）

「公欠願」への入力を手書き記入から Forms 入力に変更した約 4 か月の間、事由ごとに異なる入力必須項目のデータが欠落することや、文字化けするなどのシステム上の不具合はなかった。そのため、学生に都度説明を行わなくても、入力必須項目が未入力となること、文字が読み取れないといった問題は生じなかった。また、従来は目視に頼っていた内容確認や一覧表への転記作業については、システムによる作業支援（エラーの自動検出、一覧表ファイルへ転記するためクリップボードにコピー）が機能した。そのため、「公欠願」を受け付ける教務の作業工数は大きく短縮していると考えられる。また、現場の職員自身も作業が早く確実にできる変化を実感しており、教務作業の問題は改善したといえる。しかしながら、比較対象となる従来の作業工数が集計されていないため、数値で効果を示すことはできなかった。

3.2. 学生の申請行動（Forms 入力）

課題抽出のため Forms で申請された公欠願いの調査を行った。2024 年 4 月 8 日から 2024 年 7 月 31 日までに 559 件の申請があった。申請の内訳は、就職試験など事前に申請が可能な事由は 231 件、交通機関の事故や忌引きなど事後の申請となる事由は 308 件、申請間違えなどで公欠日が重複している再申請が 20 件であった。

表 1 は、システムにより検出したエラーの内容と件数である。進級直後の時期のためか進級前の出席番号が入力されている間違えが多い。

表 2 と表 3 は、事前の申請が可能である事由の 231 件にて、公欠を希望する日の前日までに申請されたかを事由ごとに集計した結果である。申請件数が 100 件前後と多い就職試験と編入学試験を比較すると、前日までの申請された率は 68.4%と 92.2%であり、編入学試験の方が前日までの申請された率が高い。また、申請遅れについては、公欠日より 30 日以上経ってから事後申請する学生もあり、編入学試験よりも就職試験の方が公欠願いを申請する行動を起こす時期のばらつきがあり遅れやすい。

表 4 は、就職・編入学試験の申請者の内訳である。就職と編入学の両方を事由に公欠申請した学生は 2 人のため、就職希望か進学希望かによって、学生は片方の試験を受けることにほぼ別れている。

図 8 に、5 月 30 日の鉄道事故による公欠申請状況を示す。事前申請ができずに、事後申請となる事由の公欠には、忌引や感染症などもあり、学生個人の様々な事情があるため単純に比較することができない。そこで、一度に多くの学生が朝の通学にて、影響を受けた 5 月 30 日の鉄道事故の事由による公欠申請について確認した。当該の申請は 178 件あり、そのうち、鉄道事故の当日中に、

149 件（約 84%）の申請（Forms での回答送信）があった。なお、事故当日は Forms の回答送信が集中して行われたが、システム上の不具合は無く申請を受け付けることができた。

表 1 システムにより検出したエラー件数

	学年	出席番号	公欠期間 ※
エラー検出件数	2 件	12 件	1 件

※：原則として試験日などの前後 1 日までの範囲が公欠期間

表 2 事由ごとの申請件数と事前申請率

	競技会等	学会等	就職試験	編入学試験
申請の総件数	11 件	13 件	117 件	90 件
前日まで申請件数	5 件	10 件	80 件	83 件
前日まで申請率	45.5 %	76.9 %	68.4 %	92.2 %

表 3 事由ごとの申請遅れの状況

	競技会等	学会等	就職試験	編入学試験
申請遅れの件数	6 件	3 件	37 件	7 件
遅れの最小日数	2 日	1 日	0 日	0 日
遅れの最大日数	31 日	2 日	36 日	14 日
遅れの平均日数	8.8 日	1.7 日	6.4 日	4.3 日
遅れの中央値（日）	6 日	2 日	3 日	4 日
遅れの標準偏差	10.07 日	0.47 日	8.49 日	4.37 日

表 4 就職・編入学試験の申請者内訳

	就職試験のみ	編入学試験のみ	就職と編入学試験
申請者の人数	68 人	56 人	2 人

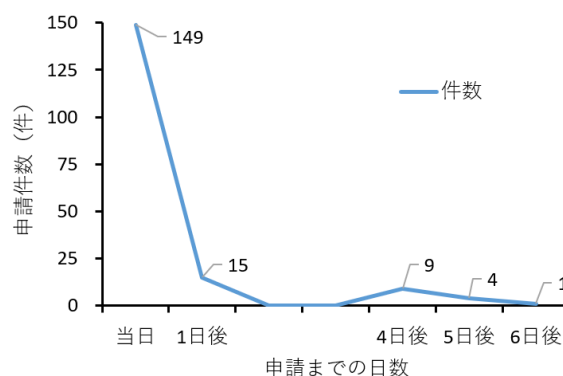


図 8 鉄道事故（5 月 30 日）による公欠申請状況

4. 考察

4.1. システムで得られた効果

Forms 入力による申請に変更した結果、日々の「公欠願」を受け付ける教務の作業性が改善した。副次的な効果としては、鉄道事故のような突発的な事由でも、チャネルへの自動投稿メッセージ（図 5）により、教職員が公欠情報を早く共有できるため、対応検討が行いやすくなったことがあげられる。

システムの運用結果から、就職試験と編入学試験の事由では、編入学試験の方が事前申請される率が高いことがわかった。理由は編入学の方が早く日程が定まっており、公欠申請しやすいと考えられる。しかし、就職と編入学では、対象となる学生がほぼ別れているため、学生の行動意識が違う傾向であることの影響は否定できない。行動変容のためには、先行研究⁵のナッジの考え方を参考とし「試験日前に公欠申請をしておくこと」を学生に適時通知する方法など検討したい。

4.2. 本研究の限界と課題

本研究の限界は、単一の教育機関である鈴鹿高専を対象としたことがあげられる。各教育機関の公欠申請については、公開されている情報が少なく質問紙調査も行えなかったため比較分析には至らなかった。

本研究の課題は、入力方法の改善だけではなく、承認や記録の方法も含めた業務の根本的な変革を考える必要があることである。理由は次のとおりである。「公欠願」を Forms 入力することになった学生からは、本システムについて不評の意見があげられた。印刷された用紙を受け取り、教員から確認印をもらった後に再び提出しなければならないことは学生の負担になっているとの意見である。従来であれば最初に受け取る用紙は無記入状態のため、クラス担任の教員など他者がまとめて受け取ることも可能であった。しかし、印刷された用紙だと毎度受け取る必要があるからだと考えられる。したがって、これらの問題を改善するには、紙ベースからの脱却を図ったペーパーレス化が必然である。また、学校業務の DX を念頭におくと、履修情報などを扱う教務システム³を基幹とし、効率的なデータ連携を図る必要がある。

学校業務の DX についての先行研究としては、業務システムの内製開発による DX 推進⁷と称して、EUC

(End User Computing)⁸で注目されている Microsoft Power Platform を導入した香川大学のシステム開発があり学生を含めた DX 推進チームが活動している。一方、鈴鹿高専では、人員リソースが限られており一部の職員がシステム開発をしているため、大掛かりな開発はできない。したがって、本研究により内製したシステムをベースに、Teams の承認機能を利用した電子承認化、教務システム³とのデータ連携を段階的に検討中である。

5. 結言

本稿ではシステムを概説し、効果と今後の DX を念頭においた課題について考察した。内製開発したシステムにより、「公欠願」を手書き記入から Forms 入力へ変更したことで、記入項目の間違いや文字が読み取れないといった手書きならではの問題を解決できることが確認できた。また、入力データがデジタル化されたため、情報共有や集計などの作業効率化が図れた。

本研究の意義は、これまで進まなかった申請書類のデジタル化をデータ入力部だけであるが実証実験的に試せたことで、ペーパーレスに向けた一歩となったことである。業務改善を始めるにあたり、ワークフローを大きく変えずに紙媒体を残すことで、情報機器の操作に不慣れな職員にも受け入れやすく導入できた。以上のことから、本研究が各種申請書類の手書き廃止を踏み出せない教育機関などの一助となることが示唆された。

今後は、考察で述べた課題を踏まえて、申請者である学生の利便性向上など、全体最適を考えたシステム化を検討していきたい。

References

1. 鈴鹿医療科学大学: “公欠願について”, <https://www.suzuka-u.ac.jp/students/kouketsu>, (参照 2024-09-19).
2. 株式会社学びと成長しくみデザイン研究所: 教務システム一体型ポータルシステム「A-Portal」, <https://manabi-labo.co.jp/product/a-portal/>, (参照 2024-09-19).
3. バリエントソフト株式会社: 高専専用入試教務システム, <https://www.variantsoft.co.jp/campusmagic/products.php>, (参照 2024-09-19).
4. Erik Stolterman, Anna Croon Fors: Information Technology and the Good Life, Information Systems Research, 687-692 (2004).
5. 平林義彦, 伊藤明: 図書館における返却遅れを減らす試み -Microsoft Teams を活用したナッジによる延滞図書督促-, 鈴鹿工業高等専門学校紀要, **56**, 7-14 (2023).
6. 森下功啓, 上久保祐志, 川尾勇達, 小島俊輔, 村田美友紀, 岩本舞: Microsoft Forms と静的 HTML を使った健康調査システム, 熊本高等専門学校研究紀要, **12**, 1-7 (2021).
7. 石川颯馬, 山田哲, 末廣紀史, 武田啓之, 國枝孝之, 米谷雄介, 後藤田中, 浅木森浩樹, 八重樫理人: 香川大学の DX 推進環境の整備と DX 推進の取り組みについて—業務システムの内製開発による DX 推進, 情報処理学会論文誌. 教育とコンピュータ, **8**, 1, 88-99 (2022).
8. Howie Goodell: End-user Computing, Extended Abstracts on Human Factors in Computing Systems, CHI '97, 132 (1997).

Development of a Public Absence Application System that can be Entered from a Smartphone - Prepare Applications Using Microsoft Forms and Excel -

Yoshihiko HIRABAYASHI^{1*}, Tsukasa NAITO², Kenichiro ITO¹, Toshihiro AOYAMA³

1: Student Affairs Office

2: Education and Research Support Center

3: Dept. of Electronic and Information Engineering

At the National Institute of Technology (KOSEN), Suzuka College, when a student wishes to be treated as an official absence, the student himself/herself must submit a request for an official absence in paper form. This application method is problematic because the items to be filled in vary depending on the reason for public absence, etc., and are easily mistaken, and because the handwriting is handwritten, so the characters may not be legible. Therefore, we developed a system to create public absentee applications by Microsoft Forms and Excel instead of handwritten ones. This paper outlines the system and discusses its effectiveness and challenges.

Key Words : Academic Affairs, Electronic Filing, Microsoft Forms, Workflow, DX

芥川龍之介「或阿呆の一生」論

—作家としての〈告白〉—

石谷 春樹

はじめに

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」⁽¹⁾という言葉を残し、芥川龍之介は、昭和二(一九二七)年七月二十四日、わずか三十五歳四ヶ月で自らの人生に終止符をうつ。そしてその死から約二ヶ月後、「或阿呆の一生」『改造』昭和二・一〇)が発表される。この作品は、作家芥川の生涯にわたる創作を考える場合、人生の終着点の直前に書かれた遺作であることから、芥川文学にとつては最も重要な作品である。そのことは、冒頭の久米正雄への依頼文、また、作品中における史実の問題、さらには様々な意味に解釈できる象徴的な表現方法など、作品を理解するためには問題が山積していることから明らかである。

この作品は「将来に対するぼんやりした不安」(遺書「或旧友へ送る手記」諸新聞、昭和二・七・二五)を感じながら、「自叙伝」を遺そうとしたものである。そのことから「彼の一生を象徴的に鳥瞰した見取図」(吉田精一氏『或阿呆の一生・歯車』「解説」角川文庫、昭和三三・二二)として、芥川の人生と併せて論じられてきた。しかし、葛巻義敏氏が「多くの人達は、——この自伝的小説『詩と真実』から、逆に彼の生活的事実である『伝記』を割り出そうとして、屢々その滑稽な事実をさえ作り上げてはいしまいか?」(『芥川龍之介未定稿集』昭和四三・二・一三、岩波書店、四一頁)という疑問が提示された。そして海老井英次氏は「従来この自伝的性格を持つ遺稿を、一つの作品としてみる立場が確立されないままに、芥川龍之介論の、特に評伝類の恰好の骨格として利用されてきたことが、この遺稿と芥川伝との蜜月的關係を強化してきてしまっていると思われるのである。」(『芥川龍之介論攷—自己覚醒から解体へ—』昭和六三・二・二五、桜楓社、四四七頁)と述べられている。さらに前原早苗氏は「芥川龍之介研究—『或阿呆の一生』芥川の私信—」(『東洋大学短期大学論集日本文学編』、平成七・三)の中で、「研究者たちへの告白文ではないのだ」と指摘されている。このような先行研究が示すように、「或阿呆の一生」が自伝的な要素を多く含んでいても、伝記的な要素だけを拾い上げ芥川の自画像を作り上げるのは、少し疑問を感じる。なぜならば、作品として発表されるからには、一つの作品として、作家はやはり作品の中で何かを語ろうとしているからで

ある。従つて史実のことが優先されるのではなく、作品中の表現こそが、作者の内面を表し、そしてその作品の読解によつて、自然に自画像は浮かび上がってくるものである。以上のことから、表現者としての作家芥川龍之介の原点に立ち戻り、作品の〈読み〉から浮かび上がってくる芥川の表現しようとしたものにできるだけ迫りたいと思うのである。研究の現状は、重要な作品であると認めながらも、論考の多くは作品の一部分に焦点を絞り考察したものが多く、作品全体を視野に入れた論考はあまり見られない。それはこの作品の考察が、自伝的な面を中心に進んできたことと、五十一章の断章からなる作品であり、一つのまとまった作品と位置づけることが難解であることが考えられる。また、諧謔的かつ曖昧で象徴的な表現も多く、短い章の集合体のような作品だけに読解の糸口が見えづらいのである。⁽²⁾

これらのことを踏まえ、小論はⅢ部に大別する。Ⅰ部は「各章の考察」である。まず、「(1)内容別の分類」を試みた。「或阿呆の一生」は、五十一章からなる断章で構成されており、書かれている内容も多岐にわたっている。そのため各章を内容別に九項目に分類し、そのことを基に考察したいと思う。分類することで、短い章であっても他の章との繋がりがから、その内容について詳細に考察できると思ふからである。その九項目とは①実母、②養父母・伯母、③女性関係、④身近な出来事、⑤生活・病・死、⑥創作、⑦人物、⑧「或阿呆の一生」の執筆、⑨人生観である。この分類については、内容について重複するところ、短くて内容が特定できないもの、隠喩など、象徴的すぎて明確にできない章もあるが、内容及び、全体の作品における位置などから総合的に判断した。⁽³⁾そして、分類を基に「(2)内容別の考察」として、小論の考察を進めることにする。Ⅱ部は、Ⅰ部の「各章の考察」を基にした「作品全体の考察」である。まず「(1)特徴的な表現「一覧表」を作成した。「暗」と「明」は、天候、火、光などにより分類し、それ以外の明暗については、「その他の明暗・天候」に分類した。なお、「海」、「空」、「山」などの景物については、明暗に関する表現のみを挙げた。また作品を全体の中で総括的に捉えることを意識しながら、「(2)特徴的な表現」、「(3)作品の構造」、「(4)作品における『彼』の設定」、「(5)『序文』の意味」の考察を試みた。最後にⅢ部では、「或阿呆の一生」の自筆原稿に着目し、「改変の考察」を行った。「(1)題名・章題の再考察」、「(2)

内容別の再考察」、「(3) 特徴的な表現の再考察」として、Ⅰ部、Ⅱ部の考察をさらに明確にした。⁽⁴⁾ 本来、作品論は、論理的な根拠を要するが、「或阿呆の一生」では、短い章も多く、内容が抽象的すぎてわかりづらいため、恣意的にならざるを得ないところもある。そこで、作品全体の〈読み〉を重視するために「Ⅰ 各章の考察」をまず試み、そのうえで、「Ⅲ 改変の考察」によって、恣意的な意見と取られがちな考察を、確証たる意見に近づけようと試みたのである。

このように様々な視点から考察することによって初めて、問題点の多い「或阿呆の一生」という一つの作品の全体像が明確になるのではないかと考えた。また、史実の考察については、芥川の告白性を考えるうえで有益だと考えるが、説得力のある先行研究を参考に最小限に留め、それよりも作家芥川という視点から表現形態にこだわって、考察することに力点を置きたいと思う。⁽⁵⁾ 小論の目的は、史実に基づく考察ではなく、芥川独自の表現方法から芥川の内面を理解することにある。

Ⅰ 各章の考察

(1) 内容別の分類

① 実母

「二母」

② 養父母・伯母

「三家」、「四 東京」、「十四 結婚」、「十五 彼等」、「二十 械」、

「三十五 道化人形」

③ 女性関係

1 「月の光りの中」(野々口豊子)「十八 月」、「二十三 彼女」、

「二十七 スパルタ式訓練」、「三十 雨」

2 「狂人の娘」(秀しげ子)「二十一 狂人の娘」、「二十六 古代」、「三十八 復讐」

3 「越し人」(片山広子)「三十七 越し人」

4 「指一つ触らずにゐた」(平松麻素子)「四十七 火あそび」、「四十八 死」

5 女性関係(全般)「十七 蝶」、「二十八 殺人」、「三十九 鏡」

④ 身近な出来事

「二十四 出産」、「三十一 大地震」、「三十二 喧嘩」、「四十三 夜」、「四十六 嘘」、

「五十 俘」

⑤ 生活・病・死

「六 病」、「四十 問答」、「四十一 病」、「四十二 神々の笑ひ声」、「四十四 死」

⑥ 創作

「七 画」、「八 火花」、「九 死体」、「十二 軍港」、「二十五 ストリントベリイ」、「二十九 形」、「三十四 色彩」、「三十六 倦怠」

⑦ 人物

1 夏目漱石「十 先生」、「十一 夜明け」、「十三 先生の死」

2 日本人「五 我」、「二十二 或画家」、

3 西洋人「十六 枕」、「十九 人工の翼」、「三十三 英雄」、「四十五 Divan」

⑧ 「或阿呆の一生」の執筆

「四十九 剥製の白鳥」

⑨ 人生観

「二 時代」、「五十一 敗北」

(2) 内容別の考察

① 実母

「二母」

「二母」の章は、「狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。広い部屋はその為に一層憂鬱に見えるらしかった。」で始まり、「着せられてゐた。」と受動的に表現される。しかも「その為に一層」とあるように理由を明確にしながらも、「憂鬱に見える」と言い切りの形を取らず、推量的に「見えるらしかった。」と自分の心情については曖昧に表現している。しかし、狂人たちが「同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。」ことから、狂人たちの姿を見て「彼の母も十年前には少しも彼等と変らなかつた。少しも」と「少しも」が繰り返されて、実母と狂人たちが、極めて変わりがなく、強調されている。このように描写されているのは、「彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。」からである。憂鬱に見える要因は、複数の狂人た

ちが広い部屋に集められていることから、彼等から実母を連想してしまうからではないだろうか。周知のように、実母フクは芥川が生後七ヶ月の時に発狂する。その影響から、実母のことを直接的に描かず、狂人たちの様子から連想して、「十年前」の実母を思い出している。これらのことから、間接的に実母が狂人であったことへの思いを語っている。その後、「ぢや行かうか？」と母のことを想起する狂人の様子から視点は離れる。しかし、移動はしたものの、持っている「脳髓」は、狂人たちの一人の物であり、「もう一度彼の母を思ひ出し」ている。実母が狂人であることが、自分にまわりつき、離れないことを物語っていると考えられる。大正三年三月十六日付、井川恭宛書簡に「一週間程前に巢鴨の癲狂院へ行つたら三十位の女の気狂ひが『私の子供だ私の子供だ』と云つて僕のあとへついて来た 子でもなくして気がちがつたのだらう 随分気味が悪かつた」とあることから、「彼の母も十年前には」と併せても、当時二十三歳であつた芥川の実体験と実母のことが重なつたと考えられる。

② 養父母・伯母

「三家」、「四 東京」、「十四 結婚」、「十五 彼等」、「二十 械」、

「三十五 道化人形」

「三家」では、「彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしてゐた。それは地盤の緩い為に妙に傾いた二階だつた。」と語られている。この「地盤の緩い為」、「妙に傾いた二階」とある家は、養家である芥川家のことである。実家の都合により養家で生活している状況を暗示し、芥川家の様子を「彼の」視点から語つたものである。実母フクが発狂するため養父母の家で「寝起きしてゐた」のであるが、暮らしてゐたというよりは、「寝起きしてゐた」だけで、最小限の生活、言わば仮住まいのような感じさせるのである。あまり感情を交えず、事実だけを語つていて、生活感もなく無機質な印象を受ける。何れにせよ養父母の家での暮らしは、自分の意思でもなく、望まれたものではなかつたことが読み取れる。「彼の伯母」とは、実母フクのすぐ上の姉フキのことである。伯母フキは一生独身であり、母代わりとして芥川を育ててくれた。「彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。」のも当然のことである。但し、「何か気味の悪い二階の傾きを感じ」るのは、彼自身の複雑な内面を象徴的に表したものである。さらに、「彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しみ合ふのかを考へたりした。」のであり、吉田弥生との結婚問題の破局をも連想させ、伯母への複雑な感情を読み取ることができる。

「四 東京」では、さらに養家について語っている。ここで出生地と養育地を確認

しておく。出生は京橋区入船町であり、養父母により育てられたのは両国区小泉町である。そして、その間を縫うように隅田川が流れている。つまりこの二つの地域は隅田川を隔てて対岸に位置する。「隅田川はどんより曇つてゐた」と語っていることから、自分の晴れ渡ることもない心情を理解することができる。「彼は走つてゐる小蒸汽の窓から向う島の桜を眺めてゐた。」とあるが、「小蒸汽の窓から」眺めているのは、養父母のいる両国区の「向う島の桜」である。「向う島の桜を眺めてゐ」ても、「彼の目には一列の檻樓のやうに憂鬱だつた。」のである。「檻樓」は「使い古した布。」のことである。「向う島の桜」を「檻樓」に喩え、さらに「いつか彼自身を見出してゐた。」のである。

芥川が塚本文と結婚したのは大正七年二月二日である。養父母のことは、その後の結婚生活にも大きく影響している。そのことは次の四章に具体的に現れている。「十四 結婚」では、「彼は結婚した翌日に『来勿々無駄費ひをしては困る』と彼の妻に小言を言つた。」とあるが、章題通りに結婚生活を直接語つてゐるというよりも、伯母の小言を妻に代弁している。結婚した翌日に妻を思いやることよりも、伯母の存在のことを気にしている。妻に発した言葉は、自分の意思ではなく、伯母の気持ちを優先させている。それに対し、「彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言つてゐた。」のである。しかも「彼の為に買つて来た黄水仙の鉢を前にしたまま。……」であり、自分のためにしてくれる妻の気持ちを知らながらも、伯母のことを一番に気にしてしまうのである。黄水仙は強い芳香があり、花は横向きに咲くことから、伯母の言葉に対する妻の執着をも感じさせる。⁶⁾

連続する「十五 彼等」も、結婚生活のことである。「彼等は平和に生活した。」「大きい芭蕉の葉の広がつたかげに。」とあることから、擁護されている。具体的理由については「彼等の家は東京から汽車でもたつぷり一時間かかる或海岸の町にあつたから。」と述べている。大正七年三月二十九日に鎌倉に引越し、伯母フキも最初はいたが、四月中旬に田端に帰つてゐる。「たつぷり」とあるように、新居と実家の距離は、伯母との間の距離感を示している。結婚生活はこの距離により平和だったのである。

一方、「二十 械」は「彼等夫妻は彼の養父母と一つ家に住むことになつた。それは彼が或新聞社に入社することになつた為だつた。」のである。大阪毎日新聞社の社員になるのは大正八年三月である。新聞社へ入社することで、養父母と同居することになる。章題の「械」は「人を捕らえるために、首、手、足につけ、自由を奪う器具のこと。」である。養父母との同居は、まさしく自由を奪われたのと同じものだったのであろう。また、横須賀海軍機関学校を辞め、作家活動に専念したいと考えた芥川にとって、新聞社への出社の義務はなく、これ以上の条件はないと思われる。

しかし、入社することにより養父母と同居しなければならなくなる。そのことを振り返って「その契約書は後になって見ると、新聞社は何の義務も負はずに彼ばかり義務を負ふものだった。」と、望む転職でありながらも、その原因を作った仕事にも養父母についての感情を露わにしている。

また、「三十五道化人形」でも「不相変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。」と、直接的に語られている。しかし、「それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。」とあるように、負の部分だけではない。つまり、実生活では「遠慮勝ちな生活」をしてきたが、「第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちを或短篇の中に盛りこんでゐた。」のである。「暗」は「遠慮勝ちな生活」、「明」は「或短篇の中に盛りこんでゐた。」ことを指すと考えられる。即ち、養父母、伯母については全否定な表現ばかりではないのである。

以上のように、「①実母」についてはこれまで語られてきたが、「②養父母・伯母」については、これまで多く語られたことはなかった。養父母については、彼の人生、生活に及ぼす影響は大きく、特に、結婚生活において、大きな影響を受けているのである。

③女性関係

「或阿呆の一生」の中で、女性関係について述べたのは十三章にも及び、全体の四分の一を占める。また、各章には、それぞれ「月の光りの中」、「狂人の娘」、「越し人」、「指一つ触らずにゐた」のように、その女性を象徴する表現が用いられており、それぞれの章がどの女性について述べられているかを容易に判断することができる。

1 「月の光りの中」

「十八月」、「二十三 彼女」、「二十七 スパルタ式訓練」、「三十雨」

「月の光りの中」と表現される女性は、野々口豊子のことである。鎌倉小町の女将で、芥川は海軍機関学校に勤務している頃、料亭を利用して知り合った。作品中には最も多く、四つの章に描かれる。四つの章から考えられることは、「十八月」は「一面識もない間がらだった。」と出会いを述べ、最後の「三十雨」では「彼女と一しよに日を暮らすのも七年になつてゐることを思ひ出した。」とあるように、二人の過ごした時間の流れを感じる。各章にも「十八月」は昼、「二十三 彼女」は夕方から夜、「二十七 スパルタ式訓練」は昼、「三十雨」は夜と、昼夜問わず描写

されている。また、場所については順に「或ホテルの階段の途中」、「薄明い広場」、「或裏町」、「寝室」であり、様々な場所が描写されている。さらに、季節も「春の山を眺めたまま」であったり、夏など様々であったりすることから、四六時中、一緒に過ごしていたのであろう。

最初の「十八月」では「彼は彼女を見送りながら、(彼等は一面識もない間がらだった。)今まで知らなかった寂しさを感じた。……」とあり、「見送りながら」、「今まで知らなかった寂しさを感じ」ていることから、次に再会するまでの短い時間でも離れ難く、彼にとつて彼女の存在が大きいことがわかる。また「かう云ふ昼にも」とあるが、「二十三 彼女」では、「暮れかかつてゐた」、「電燈をきらめかせてゐた。」夕暮れの時間である。場所も「ホテルの階段」から広場へ、そして「一面識もない間がら」から「彼等は肩を並べ」て歩いている。時間経過もさることながら、「電燈をきらめかせてゐた」のは、彼女の存在を美化しているのであらう。「彼は彼女と一しよにゐる為には何を捨てても善い気もちだった。」と表現されている。「彼女はちつと彼の顔を見つめ、『あなたは後悔なさらない?』と言つた。彼はきつぱり『後悔しない』と答へた。彼女は彼の手を抑へ、『あたしは後悔しないけれども』と言つた。」「きつぱり」とあるように、彼に戸惑いの心情はない。しかも二人の会話で気になるのは、彼女から彼の心を確かめている点である。彼女の方がこの恋愛の主導権を握っている印象を受けるが、二人が合意の基であり、この会話から二人の関係が一方的なものではないことが理解できる。

続いて「二十七 スパルタ式訓練」でも、「人力車が一台、まっ直に向うから近づいて来た。しかもその上に乗つてゐるのは意外にも昨夜の彼女だった。」と、ここでも彼からではなく、彼女から「近づいて来た。」と表現している。そして、「彼の友だちの手前、勿論挨拶さへ交さなかつた。」のであるが、「勿論」交わさないところに、二人の関係が親密であることが読み取れる。さらに「ええ、中々美人ですね。」と、「少しもためらはずに返事をした。」のであるが、「スパルタ式訓練」という章題から、自分の心中を悟られないようにごまかそうとする現状を、過酷な訓練と認識している。

最後「三十雨」では、「窓の外は雨ふりだった。浜木綿の花はこの雨の中にいつか腐つて行くらしかつた。」とある。「浜木綿」は海辺の暖かい地域に夏に咲く花である。短い命の浜木綿に二人の関係を想像している。「いつか腐つて行く」浜木綿の花とは対照的に、「彼女と一しよに日を暮らすのも七年になつてゐる」と、具体的に明示し、「退屈でないこともなかつた。」と感じながらも、この女性との関係を七年続けている。「おれはこの女を愛してゐるだらうか?」という自問自答に対して、「おれは未だに愛してゐる。」と答え「彼自身にも意外だった」と感じている。自らの意

識を越え、自分自身でさえもわからないくらい大きな存在なのであろう。ところで、「月の光の中にある」女性とはどのような女性として表現したかったのであろうか。この「月の光の中」は「彼女の顔はかう云ふ昼にも」、「彼女の顔はかう云ふ時にも」、「彼女の顔は不相変」と表現され、「月の光の中にあるやうだつた。」と結んでいる。月は自らで光ることはない。「光の中にある」とはいえ、強い光ではなく、おぼろげな光の中にいるということが想像できる。従って控えめな自己主張の少ない女性が浮かぶ。その意味から考えれば、この「彼女の顔は」に象徴されるのは、彼女の存在によつて常に「月の光の中」にいると感ずることができ、心の闇の中に灯りを灯してくれるような存在だったのではないだろうか。つまり彼女という居心地の良さをこのように表現していると考えられる。また、「月の光」は、「昼にも」、「雨の中」でも、常に「月の光の中にあるやうだつた。」と感ずている。このことは、月は反射であり常に存在しているため、どのような時でも心の闇を照らしてくれることを表現したかったのであろう。

2 「狂人の娘」

「二十一 狂人の娘」、「二十六 古代」、「三十八 復讐」

「狂人の娘」とは、秀しげ子のことである。大正八年六月の十日会で知り会った歌人であり、親しく交わるが、後に彼女の利己主義に嫌悪を抱くようになる。彼の女性関係を語るにしても「狂人の娘」という章題からも明らかのように「狂人」しかも未熟な女性を意味する「娘」と表現されており、語っている時点においては、彼女のことによい印象をもっているとは思えない。「二十一 狂人の娘」では「二台の人力車は人気のない曇天の田舎道を走つて行つた。」とあるように「田舎道」である。この後、考察する「八 火花」では「アスファルトの上を踏んで行つた。」ことを考えると、この「田舎道」にも意味を含んでいる。人通りの少ない、まだ踏み入れた人が少ない道であることから、女性関係を暗示している。また、「その道の海に向つてゐることは潮風の来るのでも明らかだつた。」とあり、道中と目的地に「海に向つてゐる」ことが明確になっているが、行き着いた所は「磯臭い墓地」である。このことは彼自身が行き着くところが「墓地」と知りながらも、どうすることもできないことを表している。さらに「蛸殻」も描写されている。そして「彼自身をここへ導いたものの何であるかを考へてゐた。」のである。その結果「それは決して恋愛ではなかつた。」と「決して」と表現することで、恋愛でないことを強調している。そのうえで、「前の人力車に乗つてゐるのは或狂人の娘だつた。」ことを述べる。前を走るのが狂人の娘、後ろが彼ということから考えられるのは、恋愛の主導権を女

性が握っていることを表現したかったのであろう。彼は後について行きながら、恋愛であることを否定し、「兎に角我等は対等だ」と述べ、「動物的本能ばかり強い彼女に或憎悪を感じ」、自分の意志ではなく、女性に翻弄されている姿が読み取れる。そして、その憎悪が「彼女の心を捉へてゐない彼女の夫を軽蔑し出した。」のであり、彼女に留まらず、彼女の夫にも向けられている。

また、「二十六 古代」では、「あらゆることを忘れてゐた。」ことの一つに、「狂人の娘の手を脱した彼自身の幸運さへ……」と間接的に喜びを表現する例として挙げられているが、同時にそれだけ苦しめられたことがわかる。

さらに、「三十八 復讐」では「七年前に絶縁した狂人の娘」と具体的に明記している。この章題は「復讐」であり、「彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、残酷な欲望さへない訣ではなかつた。」と憎悪は増しているのである。「歯車」『大調和』昭和二・六に「一 レエン・コウト」のみ掲載、のち『文藝春秋』昭和二・一〇にすべて掲載の「三夜」の中で、夢の中に「狂人の娘」が出てきて、寝台の上のミイラのような裸体の女がこちらを向いている。その女を「僕の復讐の神、——或狂人の娘」と書いている。また、芥川は、小穴隆一に宛てた遺書の中で「僕等人間は一事件の為に容易に自殺などするものではない。僕は過去の生活の総決算の為に自殺するのである。しかしその中でも大事件だつたのは僕が二十九歳の時に口夫人（注、しげ子）と罪を犯したことである」と書かれている。この章では恋愛感情は書かれておらず、憎悪だけを露にしている。七年間思いが変わらない「月の光りの中」と「七年前絶縁した狂人の娘」は対照的である。関係を絶つてからも、精神的に苦しめられている姿が語られているのである。

3 「越し人」

「三十七 越し人」

「越し人」とは片山広子のことである。大正十三年七月、軽井沢滞在中に出会った歌人である。知性的なところを慕うようになる。「彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、『越し人』等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。」と語る。この章は三十歳の頃と考えられる。「二十一 狂人の娘」の「兎に角我等は対等だ」と述べた時の感情とは異なり、「才力の上にも格闘出来る女」とは、本当の意味としての対等であつたのであろう。芥川は実際、大正十四年三月の『明星』に発表した歌に「越し人」という題をつけている。この「越し人」なる女性について「侏儒の言葉（遺稿）」（『文藝春秋』昭和二・一〇、一一）の「わたし」の「又」の中に「わたしは三十歳を越した後、いつでも戀愛を感じるが早い、一生懸命に抒

情詩を作り、深入りしない前に脱却した。しかしこれは必しも道徳的にわたしの進歩したのではない。唯ちよつと肚の中に算盤をとることを覺えたからである。」と書かれている。この章に続く「三十八 復讐」で「狂人の娘」について触れていることから、抒情詩を作ることによって、同じ過ちを繰り返さないように回避している姿を読み取ることができる。想いを歌にしていたことから、「切ない気持ち」を表現することによって、彼にとつての女性は様々な存在になり得るのである。女性に翻弄されるばかりではなく、複雑な感情を制御していたと考えることもできる。

4 「指一つ触らずにゐた」

「四十七 火あそび」、「四十八 死」

「指一つ触らずにゐた」女性は、妻の文の幼友達で平松麻素子のことである。昭和二年の四月七日、帝国ホテルで二人は心中の計画をしていたが、平松は自殺を止めようとしたらしく、未遂に終わる。作品の終わり近くの連続する二章であるが、内容も連続しており、死と直結していることである。「四十七 火あそび」の冒頭で、「彼女はかがやかしい顔をしてゐた。それは丁度朝日の光の薄氷にさしてゐるやうだつた。」のである。「月の光りの中」にいる女性とは対照的で、顔自体が「かがやかしい顔」であり、「朝日の光の薄氷」と描写している。そして、「彼は彼女に好意を持つてゐた。しかし恋愛は感じてゐなかつた。」と語りながら、「彼女の体には指一つ触らずにゐたのだつた。」ことを強調している。また、これまでのように女性が恋愛の主導権を握っているような様子は見られず、女性が「死にたがつていらつしやるのですつてね。」と彼のことを理解し、思いやつてゐるような印象を受けるのである。だからこそ、自分自身でも「彼は彼自身の落ち着いてゐるのを不思議に思はずにはゐられなかつた。」のであろう。自分と死を共にしてくれるということ、心を許し、女性を信頼していると考えられる。「プラトニック・スウイサイド」は「精神的自殺」。「ダブル・プラトニック・スウイサイド」は「精神的心中」である。妻のよく知る相手であり、精神的に癒される存在だったのかもしれない。

さらに「四十八 死」にも「彼女とは死ななかつた。」という書き出しで連続して登場する。「未だに彼女の体に指一つ触つてゐないことは彼には何か満足だつた。」と「未だに」が付け加えられ、自分自身の行動について納得している。これまでの女性とは明らかに違う精神的な安らぎのようなものを彼は求めていることを明確にしているのである。

5 女性関係(全般)

「十七 蝶」、「二十八 殺人」、「三十九 鏡」

次の三つの章についても、間接的に女性関係に通じていると考えられるため、ここで触れておくことにする。「十七 蝶」は、「藻の匂の満ちた風の中に蝶が一羽ひらめいてゐた。彼はほんの一瞬间、乾いた彼の唇の上へこの蝶の翅の触れるのを感じた。」と冒頭は嗅覚と視覚で表現している。「藻」は水の中で生息するものであるのに「風の中」に「藻の匂」が満ちている。本来、生息するものと場所との間に少しのズレが生じている。触れていった蝶が象徴するものは、このあとの「十八 月」との関連から、女性の存在と考えられる。「翅の粉」は「ほんの一瞬间」であつたのにも拘らず、「数年後にもまだきらめいてゐた」のである。「月の光りの中」の「七年後」まで心に残っていることを表しているなど、女性関係の記述には、期間が示されているため、類似している。「乾いた彼の唇」だったからこそ、「ほんの一瞬间」だけでも、彼の心を魅了したのかもしれない。それぞれの女性関係について述べる前置きとして重要な役割をしている章である。

「二十八 殺人」には、「田舎道は日の光りの中に牛の糞の臭気を漂はせてゐた。彼は汗を拭ひながら、爪先き上りの道を登つて行つた。道の両側に熟した麦畑は香ばしい匂を放つてゐた。」とあり、「狂人の娘」と同様で女性関係を意味するような「田舎道」の臭気が描写されている。ここでは二つの臭気がある。「爪先き上りの道を登つて行つた。」ことによって「熟した麦畑は香ばしい匂を放つてゐた。」のである。すると、「黄ばんだ麦の向うに羅馬カトリック教」が現れている。「田舎道」の先ではなく、「黄ばんだ麦の向う」であることから、救いの手は必死に上る道の先にあるのではなく、さらに遠いその「向う」にある。

また、「三十九 鏡」の中の友人との話で「君はまだ独身だつたね。」と問うと友人は「いや、もう来月結婚する。」と答え、この言葉に「彼は思はず黙つてしまつた。」のである。彼自身に置き換えれば、彼は結婚してゐながらも女性と関係を持つてゐる。彼の感じた矛盾は、彼自身の女性関係に起因するであろう。そして、「嵌めこんだ鏡」によって「無数の彼自身を映してゐた」のであるが、この鏡によつて映されたものは「何か脅すやう」である。「三十七 越し人」、「三十八 復讐」に続く章であることから、結婚後も女性に対して複数の顔をもつ自分自身の姿と考えられる。

④ 身近な出来事

「二十四 出産」、「三十一 大地震」、「三十二 喧嘩」、「四十三 夜」、「四十六 嘘」、「五十 俘」

ここに挙げた六つの章は芥川の身近に実際に起こった出来事である。順を追って見ていこう。「二十四 出産」は「彼は何か鼠の仔に近い赤児の句を感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。」と述べている。「赤児の句」を「何か鼠の仔に近い」と感じている。「思はずにはゐられなかつた。」とは、本当は思いたくない心境であるが、自分の意思ではなく無意識に何かがそうさせるのである。「二母」で「狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。」とあり、「鼠色」と描かれていたことから、「鼠」に共通点がみられる。②出産の喜びよりも不安を感じ、苦悩していると考えられる。また「何の為にこいつも生まれて来たのだらう? この娑婆苦の充ち満ちた世界へ。——何の為に又こいつも己のやうなものを父にする運命を荷つたのだらう?」という問いも生まれている。「赤児」に問いかけているようにみえるが、彼自身に自問自答しているのである。さらに、「彼の妻が最初に出産した男の子だつた」のであるが、本心では「娑婆苦の充ち満ちた世界」、「己のやうなものを父」と表現しており、喜んではない。自分自身に置き換えて、決して生まれてきてよかったとは思っていない。大正九年三月に芥川の長男、比呂志が誕生しているが、このように生まれてくることの意味を自らに問いかけたものである。

次に、「三十一 大地震」は、大正十二年九月一日に起こった関東大震災のことである。芥川自身が実際に体験したことであり、登場する「彼の姉」は芥川の次姉新原ヒサ、「異母弟」は芥川の実母フクの妹フユと、実父新原敏三の間に生まれた新原得二、「彼の夫」はヒサの再婚相手の西川豊を指し、すべて実在する人物である。中でも「姉の夫は偽証罪を犯した為に執行猶予中の体だつた。」とあるが、実際に芥川が市ヶ谷刑務所に収監されているのを訪ねたことが、大正十二年一月二十二日付、松岡譲宛書簡に書かれている。「死骸の句」も「それはどこか熟し切つた」、「杏の句に近いものだつた」と感じ、「炎天に腐つた死骸の句も存外悪くないと思つたり」と、死に親しみをもって冷静に見つめ、客観的に描いている。母の発狂について初めて語つた「点鬼簿」(『改造』大正一五・一〇)でも同じ死の句に「杏の句」を感じている。また、「十三の子供の死骸」に「神々に愛せらるるものは天折す」という言葉を書き出しており、亡くなつた子供への優しさを感じる。一方、「彼の姉や異母弟はいづれも家を焼かれてゐた」ため、「誰も彼も死んでしまへば善い。」と偽証罪を犯した姉の夫を非難している。命が与えられていながらも罪を犯していることへの、やるせない想いから、義兄に対する怒りの感情がこのような言葉になつたのである。

さらに「三十二 喧嘩」は「彼は彼の異母弟と取り組み合ひの喧嘩をした。」から始まり、「異母弟」のことを語る。「異母弟」は「彼の為に」、「圧迫を受け易いのに」、「違ひなかつた」。彼も「彼の弟の為に」、「自由を失つてゐるのに」、「違ひなかつた」

のである。そのうへ、「彼の親戚は彼の弟に『彼を見慣へ』と言ひつづけてゐた」結果、彼も「手足を縛られるのも同じことだつた。」のである。「縁先の庭には百日紅が一本、——彼は未だに覚えてゐる。」とあるが、「百日紅」は耐病性であり、まさしく、「異母弟」の影響を受け耐え忍ぶ姿が象徴的に描写されていると考えられる。

続いて「四十三 夜」で「三十五歳」頃の結婚生活について語る。これまでのように養父母の影響が見られるのではなく、行き先は章題が示すように暗い「夜」である。二人は「荒れ模様の海」に客観的に「船」を眺め、「薄明りの中」を航海している。「二度目の結婚」という表現から、鎌倉における新生活を指すと考えられ、伯母から離れ、もう一度二人で新たに歩もうとした心情を読み取ることができる。「あすここに船が一つ見えるね?」という船はまさしく二人の結婚生活を意味する船である。しかし、「櫓の二つに折れた船」と表現されているように、「櫓」即ち帆柱が、折れているのである。帆柱は風を受けないと進めない。もはや折れているのは、風を受けることができず、進むことができないことを意味するのである。

「四十六 嘘」は「彼の姉の夫の自殺は俄かに彼を打ちのめした。」と始まる。「彼の姉の夫」は、先に述べた義兄の西川豊である。昭和二年一月六日、保険金目当ての放火の嫌疑をかけられ、取り調べの後、鉄道自殺する。義兄の死により「姉の一家の面倒も見なければならなかつた。」ことは事実であり、東奔西走する。その心境は「彼の将来を少くとも彼には目の暮のやうに薄暗かつた。」が、「不変のいろいろの本を読みつづけ」、「フランス・ヴィンソンだけは彼の心にしみ透つた。彼は何篇かの詩の中に『美しい牡』を発見した」のである。彼も同様に、「人生のどん底に落ちようとした。が、真似をすることはできず、「彼はだんだん衰へて行つた。」のである。

最後に、「五十 俘」は「彼の友だちの一人は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。」で始まる。これは友人の宇野浩二のことであり、「薔薇の花さへ食つてゐたと云ふことだつた。」ということも事実である。実母だけでなく、身近にいる友人が発狂することで、その恐怖はかなり大きいものであつたと考えられる。「この友達にいつも或親しみを感じてゐた。」理由が「孤独の一人一倍身にしみてわかる為」とある。発狂した友人の宇野に自分を照らし合わせ、発狂への想いを述べるのである。宇野に贈つた「テラコッタの半身像」は「ゴオゴリイ」の半身像である。「ゴオゴリイ」は一八五二年二月十二日未明、発作により、ほぼ完成していた「死せる魂」第二部の原稿を暖炉で焼いてしまう。これ以降、作家は衰弱の度を深め、摂食を拒否し、また医師をも拒んだ。同年同月二十一日、死去する。この章の後半には、フランスの小説家・詩人である「ラディゲ」と「コクトオ」の名前を挙げる。二人に共通するのは、最後に神を信じていることであるが、彼は「神の愛

を信ずることは到底彼には出来なかつた。」のである。周知のように、神については自死の際、枕頭に聖書を置いていたことから影響は大きいはずであるが、それほど自分の人生に幸せを見出すことができなかったと考えられる。

これらは、芥川の人生において、実際に起こった出来事であり、負の要素が多い。長男の出生までも、負の要素を帯びてしまっている。しかし、芥川の晩年の不幸を思えば、納得できないこともない。晩年の芥川の人生が如何に苦しかったのか知ることができる。

⑤生活・病・死

「六病」、「四十問答」、「四十一病」、「四十二神々の笑ひ声」、「四十四死」

次の二つの章については、社会批判をしていながらも、自らの生活について述べている。「四十問答」において、問答する相手は「尤も誰にも恥づる所のないシルクハットをかぶつた天使」であり、彼と対極的な位置にいる悪を犯すことのない善なる人であろう。「おれはお前は善悪の差を認めてゐないと思つてゐた。ではお前の生活は？」と自分の生活について質問されるが、答えられていない。「善悪の差を認めてゐないと思つてゐた。」のは、「善」と「悪」の区別がつかないことを意味しており、彼自身は自分の生活を「悪」とは認識していないが、「悪」の要素が強いことを指摘している。

さらに「四十一病」では、彼の病気を挙げ、「しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、——彼の軽蔑してゐた社会を！」と「四十問答」に引き続き、社会を軽蔑している。そして、「十戒を破つたモーツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。」のである。モーツアルトはオーストリアの作曲家で自由に生活し、芥川と同じ三十五歳で亡くなっている。「しかししもや彼のやうに」とあることから、彼はモーツアルトに自分の生き方を照らし合わせることで、「彼のやうに」モーツアルトは苦しんだことはあるまいと感じている。彼の苦しみを知るべきである。

次に「六病」の中で、「Talipot」の言葉に「七十年に一度花を開く。……」という説明を見つけ、現実の世界から想像の世界への逃避が行われる。そして「辞書の上へ啖を落した。啖を？——しかしそれは啖ではなかつた。」と、一度「啖」であるとしながらも否定している。大正四年五月十三日付、井川恭菴書簡には「肺かと思つて大分心配した」ことが記されており、検査の結果、疑いがないという診断であったが、芥川は自分が結核だと思ひ込んでいる。同井川恭菴五月二十三日付書簡の

中で「僕自身も時々往来へ痰を吐いてゐる。」と述べている。「彼は短い命を思ひ、もう一度この椰子の花を想像した。この遠い海の向うに高だかと聳えてゐる椰子の花を。」と、七十年に一度しか咲かない椰子の花は想像でしかなく彼には現実味を帯びていないのである。

さらに、自殺について「四十二神々の笑ひ声」の中で、「二三年前に彼自身の書いた『神々は不幸にも我々のやうに自殺出来ない』と云ふ言葉を思ひ出ししながら……」と描写されている。その他の箇所にも多く見られるように「薄暗い」ものではなく、「春の日の当つた松林の中を歩いてゐた。」のである。わざわざ「三十五歳の彼」と年齢が具体的に述べられ、「二三年前」の言葉を思い出していることから、自殺できることへの幸福を感じている。

また「四十四死」の中で、具体的に自殺を試みた結果、「俄かに死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那の苦しみの為に恐れたのではなかつた。」と述べながらも、根本的な要因は明確にされていない。ここでは他に別の何かの要因があるという心情だけを伝えようとしている。そして、「窓格子の外はまつ暗だつた。しかしその暗の中に荒あらしい鶏の声もしてゐた。」のである。自殺を考える彼にとって、見えるものは視覚による「まつ暗」な闇の世界であろう。しかし、「その暗の中に荒あらしい鶏の声もしてゐた。」とあることから、朝の訪れも予感させる。この「鶏の声」を「荒あらしい」と表現していることから、視覚の暗闇から聴覚により目覚めさせようとする鳴き声である。

「六病」は、「二十歳」、「四十二神々の笑ひ声」は「三十五歳」であり、客観的に病氣や自殺について述べている。また、「四十四死」では、自殺を試みて、「俄かに死を恐れ出した。」のである。さらに、同じ章題の「四十八死」で、「女性関係」の「指一つ触つてゐない」の中で考察したように「彼に彼女の持つてゐた青酸加里を一罈渡し、『これさへあればお互に力強いでせう』とも言つたりした。それは実際彼の心を丈夫にしたのに違ひなかつた。」とあることから、死についての恐怖は、後に心中という方法で逃れようとしていたと考えられるのである。

⑥創作

「七画」、「八火花」、「九死体」、「十二軍港」、「二十五ストリントベリイ」、「二十九形」、「三十四色彩」、「三十六倦怠」

まず、「七画」、「二十九形」の二つの章は、創作と言うよりも、芸術についての発言である。「七画」について、「ゴッダの画集を見てゐるうちに突然画と云ふものを了解した。勿論そのゴッダの画集は写真版だつたのに違ひなかつた。が、彼は写

真版の中にも鮮かに浮かび上る自然を感じた。」とあるが、「ゴオグ」はオランダの画家ゴッホのこと。芥川は大正三年十一月三十日付、井川恭宛書簡の中で「此頃になつてほんとうにゴッホの絵がわかりかけたやうな気がする」と述べている。「画集は写真版だつたのに違ひなかつた。」であり、実物ではなくとも、優れたものほどのような形でも評価される。そして、ゴッホの写真集によつて、「この画に対する情熱は彼の視野を新たにした。彼はいつか木のうねりや女の頬の膨らみに絶え間ない注意を配り出した」ように、自分が実感し、創作にも活かしていくのである。「前にこの道を通つたもの」は、ゴッホであり、「耳を切つた和蘭人」も精神に異常をきたしたゴッホのことである。自分で耳を切り、最後は自殺するゴッホの姿に自分自身の将来の姿を見出している。

「二十九 形」は、「それは鉄の銚子だつた。彼はこの糸目のついた銚子にいつか『形』の美を教へられてゐた。」という最も短い章である。「銚子」は盃に日本酒を注ぐための酒器であり、「糸目」は器物に細く刻みつけた筋。糸目がついた銚子「だからこそ、『形』の美を教へられてゐた。」のである。形だけでは「美を教へ」ることはなく、「糸目」という模様をつけ加えることによつて、初めて「銚子」の形が美しいものになる。即ち、無関係のように見えるものが一つになつて初めて、美は完成することを語っているのではないだろうか。

次に「八 火花」については、このあとの「十三 先生の死」でも少し触れるため、ここでは創作に関して述べることにする。「彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。雨は可也烈しかつた。彼は水沫の満ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。」のである。「雨は可也烈しかつた」にも拘らず、「彼は雨に濡れたまま」である。このように表現される状況によつて、彼を取り巻く環境の厳しさを表している。しかし、歩いているのは「アスファルト」で舗装された道である。先述した「田舎道」とは違う。「すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を発してゐた。」のである。「架空線」はここでは、電線のことであり、雨の中に火花を散らしている。「目の前の架空線」は、「同人雑誌へ発表する彼の原稿を隠してゐた。」ことから、厳しい環境の中、芸術家としての華々しい活躍を意味するのであろう。また、「もう一度後ろの架空線を見上げた。」のであるが、「後ろの架空線」は、「人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは、——凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。」と述べていることから、人生を振り返り、激しい雨という逆境の中でも、火花を放っているように、何よりも得たいものが芸術家としての成功であつたことを語っている。

さらに創作への思いが端的に現れているのが「九 死体」である。その中で、「彼はその死体を眺めてゐた。それは彼には或短篇を、——王朝時代に背景を求めた或

短篇を仕上げる為に必要だつたのに違ひなかつた。が、腐敗した杏の匂に近い死体の臭気は不快だつた。」とある。「死体の臭気」を「腐敗した杏の匂に近い」とし、「不快だつた。」と感情を述べる。しかし、死体自体については、直接、感情的には語っていない。ここでの王朝物を仕上げるための作品は「羅生門」を指す。彼にとつては作品を仕上げるために必要な死体。彼の友だちにとつては実験のために必要な死体。二人にとつて死体は必要不可欠なものである。『己は死体に不足すれば、何の悪意もなしに人殺しをするがね。』しかし勿論彼の答は心の中にあつただけだつた。」と述べている。創作にける彼の思いそのものである。自分の創作欲のために必要だというだけである。言わば、「死体」は創作のための道具であり、感情を捨てた一つの物として取り扱っている。この時の体験は大正三年三月十六日付、井川恭宛書簡の中に「そのあとで医科の解剖を見に行つた」と記されている。

「十二 軍港」では、「潜航艇の内部は薄暗かつた」と始まるが「目金に映つてゐる」のは「明るい軍港の風景」である。彼の周りは「薄暗かつた」が、見えているものは明るい。潜航艇から見た軍港の様子であるが、「金剛」も見える。そして「小さい軍艦を眺めながら、なぜかふと阿蘭陀芹を思ひ出した。」のである。「阿蘭陀芹」はパセリのこと。「かすかに匂つてゐる阿蘭陀芹を」思い出しているということは、「阿蘭陀芹」に重点が置かれている。この章は、漱石に関することが続く章の間に配列されているが、「先生」という表記がないため、「⑦人物 1 夏目漱石」には分類しなかつた。だが、漱石のことについて直接触れていなくとも、少なからず漱石の存在の大きさと関連して、自分の存在を見つめている。つまり、自分のことを漱石に寄り添っている小さいものと認識したと考えられ、同時に「かすかに匂つてゐる」とあることから、少しでも自分の存在価値を見出ししているとも考えられるのである。芥川は大正六年六月二十日に実際に乗り、航海見学に同行し、「軍艦金剛航海記」を記している。実際に、軍艦金剛に乗り視察した経験をもとにして、感じたことをこのように書いたのであろう。

「二十五 ストリントベリイ」では〈告白〉に関して少しではあるが明らかにしている。その中で「ストリントベリイも亦情人だつた伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のない嘘を書いてゐる。……」と述べている。ここでは「書いてゐる」と確信をもっている。「痴人の告白」はストリントベリイが元妻への憎悪を書いたものであるが、嘘を書いているということは、憎悪ばかりを書いたものではないということである。「彼と大差のない」ということは、彼自身に自分の姿を写し出しており、自らの創作方法について明らかにしている。

一方、創作への思いの変化を示しているのが「三十四 色彩」である。「三十歳」と具体的に年齢を示しながらも、「いつの間か」と自分が知らない間に「空き地を愛

してゐた。」のであり、初めは愛していなかったことがわかる。「空き地」は、「苔の生え」ていることで、年月が経っていることを表し、「煉瓦や瓦の欠片」も「散らかつてゐる」。その「空き地」を「セザンヌの風景画」と変わりはないとしているが、七八年前の、創作する情熱を思い出しながら当時は知らなかった色彩を「いつの間にか」、「愛してゐた」のである。「文芸的な、余りに文芸的な」『改造』昭和二・四（八、七月は休載）の中で、「デッサンよりも色彩に生命を託した画は成り立つてゐる。幸ひにも日本へ渡つて来た何枚かのセザンヌの画は明らかにこの事実を証明するのであらう。僕はかう云ふ画に近い小説に興味を持つてゐる。」と述べている。

最後に創作欲について語る。「三十六 倦怠」の中で、彼は「君たちはまだ生活慾を盛に持つてゐるだらうね？」と自分が若い頃、生活慾を求めていたように、或大學生も当然求めていることを想定して問うている。つまり或大學生に自分の若い頃を投影させている。そして、「ええ、——だつてあなたでも……」と聞かれ、「ところが僕は持つてゐないんだよ。制作慾だけは持つてゐるけれども。」と答える。すると或大學生から「制作慾もやつぱり生活慾でせう。」と質問されるが「彼は何とも答へなかつた」のである。いやこの場合、答えられないのであらう。すべてのことは生きるためと考える或大學生と昔は同じ考えであつたのだらう。「制作慾」も生きるためであり、「生活慾」になるからである。しかし、彼は「いつの間にか」「生活慾」と「制作慾」を切り離し別々のものと考えようになつてゐる。死を前にして「生活慾」がなくなり、「制作慾」だけしか残つてゐないのではないか。だからこそ「芒原の中を歩いてゐた」のである。枯れ果てて何もない中に、「いつか」「噴火山」が表れ、感じたものは「何か羨望に近いもの」である。それは今の彼の全てを破壊するものとして描かれてゐる。創作中心の人生を振り返り、彼の心情が語られてゐる。

⑦人物

人物については「1 夏目漱石」、「2 日本人」、「3 西洋人」の大きく三つに分けることができる。

1 夏目漱石

「十 先生」、「十一 夜明け」、「十三 先生の死」

まず、三つの章に登場する夏目漱石である。芥川は大正四年の暮れに漱石を訪ねている。「十 先生」では、「彼は大きい檜の木の下に先生の本を読んでゐた。檜の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さなかつた。」とある。「檜の木」は材質が硬く、

耐久性にも優れる。また常緑樹であり、防風林としての役目を果たし、「どんぐり」を育てる。「大きい檜の木」の特徴は芥川の師、夏目漱石の存在そのものである。「秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さなかつた。」ことから、微動だにしない、漱石の存在の大きさ、威厳が伝わってくるうえに、他の箇所とは違い「秋の日の光の中」と描写されている。一方、「闇中間答」『文藝春秋』昭和二・九)の中には次のような描写が見られる。

或聲 お前はそれでも夏目先生の弟子か？

僕 僕は勿論夏目先生の弟子だ。お前は文墨に親しんだ漱石先生を知つてゐるかもしれない。しかし、あの氣違ひじみた天才の夏目漱石を知らないだらう。

「あの氣違ひじみた天才の夏目漱石を知らないだらう。」とあり、尊敬の念とは別の感情を見出している。そのような二律背反する心情を「どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保つてゐる。」と描写しており、漱石との関係を壊れやすい「硝子の皿を垂れた秤」が「平衡を保つてゐる。」のである。

続いて「十一 夜明け」も漱石のことである。芥川が漱石に出会つたのは、大正四年のことであり、ここでは明確に二十五歳と述べられている。さらに「先生に会つた三月目」と具体的に述べられ、大正五年二月二十日、「鼻」を激賞した手紙を漱石から貰つた頃のことである。章題が示すように「夜明け」であり、「市場に群つた人々や車はどれも薔薇色に染まり出した。」とあるように「薔薇色」である。まさしく、「一本の巻煙草に火をつけ」彼にとつての創作の成功の喜びをこのように表現したのであらう。さらにその喜びは、しばしば指摘されているように、芥川は嫌いで有名であるが、「か細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠へかかつた。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。」とまで表現されている。また、「市場のまん中には篠懸が一本、四方へ枝をひろげてゐた。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の真上に星が一つ輝いてゐた。」とあり、「篠懸」は「スズカケノキ」で、成長が早く、花言葉は「天恵」、「天才」である。「その根もとに立ち」見上げた時の星の輝きは、「鼻」が激賞され、章題の「夜明け」が示す通り、芥川の作家人生の夜明けを示すものだったと考えられる。

最後の「十三 先生の死」では、「彼は雨上りの風の中に或新しい停車場のプラツトフォオムを歩いてゐた。空はまだ薄暗かつた。」と述べる。「雨上りの風の中」とは、先述したように「八 火花」の頃の創作上の厳しさを象徴した「可也烈しい」雨の伏線であらう。「ポケットは彼等の同人雑誌へ発表する彼の原稿を隠してゐた」が、ここでは「電報を外套のポケットへ押しこんだまま」であることから、漱石による「鼻」の激賞に「紫いろの火花」を夢に見ていた頃との対比であり、「押しこん

だまま」ということは、動揺は大きい。この章においては、その雨も上がっており、その後、風が吹いている。しかも「雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎった。」ほど強いものである。そして彼は「風の中に或新らしい停車場のプラットフォオムを歩いてゐた」のである。しかし、そのレールはまだ「鉄道工夫」が作業をしているように工事中で完成していない。「十一 夜明け」で「巻煙草に火をつけ」ていたが、ここでは、「彼は巻煙草に火もつけずに」いる。煙草を吸えないくらい風の風なのである。「雨上りの風」は容易に、思い通りの行動をさせてくれない。そのうえ、現実の工夫たちの働く音と彼の感情を、雨上りの風がかき消している。「雨上りの風」により、「センセイキトク」の電報の知らせを「歎びに近い苦しみ」と感じている。この複雑な感情は、先述した「闇中間答」にあるような二律背反する心情からくるものであると考えられるが、ここでは安堵感のような少しの歎びも感じながらも、大いなる師を失ったことによる悲しみと動揺、不安、そしてそれに伴い予想される困難の方が大きい。近づいてくる上り電車は、漱石のいる東京へ向かう電車であるが、これからの彼の人生の乗り換えを示唆するものとも考えられる。また「薄い煙」は、「巻煙草」と対比するものであろう。のちに、「芥川文子あて」の遺書の中に、「僕の作品の出版権は（若し出版するものとせん乎）岩波茂雄氏に譲与すべし。（僕の新潮社に対する契約は破棄す。）僕は夏目先生を愛するが故に先生と出版書肆を同じうせんことを希望す。」とあるように、漱石への敬愛の深さを知ることができるのである。

2 日本人

「五 我」、「二十一 或画家」

人物については、二人の日本人が登場している。「五 我」において、「けふは半日自動車に乗つてゐた。」という「彼の先輩」の言葉に「何か用があつたのですか？」と聞くと、先輩は「唯乗つてゐたかつたから。」と答える。「その言葉は彼の知らない世界へ、——神々に近い『我』の世界へ彼自身を解放した。」のである。自動車に乗ることは、目的地に到着するための手段である。先輩の言葉の「唯乗つてゐたかつたから。」という感情のままの自由な反応は、経験したことなく、彼には理解できない「神々に近い『我』の世界」なのである。しかし、「彼は何か痛みを感じた。が、同時に又歎びも感じた。」とあるように、自分にはできないと思ひながらも、「彼の知らない世界」を完全に否定しているわけではない。さらに「そのカツフェは極小さかつた。しかしパンの神の額の下には赭い鉢に植ゑたゴムの樹が一本、肉の厚い葉をだらりと垂らしてゐた。」とある。「パンの神」はギリシャ神話に登場する山羊

座の神。上半身と下半身の姿が違う。そのうえ、「ゴムの樹」は、鑑賞用であるが、ここでは「肉の厚い葉をだらりと垂らして」いることから「極小さい」カツフェでは場所を取り、観賞用としては適していない。それぞれの相違と矛盾を示しながら、「彼は何か痛みを感じた。が、同時に又歎びも感じた。」ように、自分との相違を感じながらも、同時に自分にしかわからない歎びを感じている。

また、「二十二 或画家」では、「それは或雑誌の挿し画だつた。が、一羽の雄鶏の墨画は著しい個性を示してゐた。」そして「誰も知らない詩も発見した。のみならず彼自身も知らずにゐた彼の魂を発見した。」と、画家の「著しい個性」に引かれる。しかも、「或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍に忽ちこの画家を思ひ出し」、「傷き易い彼の自画像にも違ひなかつた。」ことを発見する。「唐黍」から「雄鶏」の絵を連想し、さらに画家のことを思い出している。画家にとって作品は「著しい個性」が表現されたものである。この画家は小穴隆一のことである。芥川は大正八年に雑誌の挿絵の事で、滝井孝作が芥川のところへ連れてきたことから知り合ひ、芥川の死に至るまで親しくつきあう。「それは彼の一生のうちでも特に著しい事件だつた。」とあるように、衝撃的な出会いであつた。「しかしかう云ふ発見は彼を憂鬱にするだけだつた。」が、「もう遅い。しかしいざとなつた時には……」とこれまでの自分のことを省みながら、自分をさらけ出す覚悟が見られるのである。作家として自分の作品も「著しい個性を示し」、「彼の自画像」でありたいと強く願っているのである。

3 西洋人

「十六 枕」、「十九 人工の翼」、「三十三 英雄」、「四十五 Divan」

西洋人が次の四つの章で登場する。「十六 枕」は「アナトオル・フランスの本を読んてゐた。」、「十九 人工の翼」は、冒頭から「アナトオル・フランスから十八世紀の哲学者たちに移つて行つた。が、ルツソオには近づくなかつた。」と述べ、「人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテールはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。」と続く。さらに「三十三 英雄」は「彼はヴォルテールの家の窓からいつか高い山を見上げてゐた。」、そして「四十五 Divan」は「詩人ゲーテ」である。年齢とともに影響を受けた順に配列されており、それぞれの内容が関連している。

最初の「十六 枕」では「枕にしなから」であることから、夢見がちな心地の良いものであつたのであろう。ここで重要なのは、「読んてゐた。」と過去形であり、「半身半馬神のあることには気づかなかつた。」ことである。本来「薔薇の花」が匂うは

ずなのに、冒頭部分で「薔薇の葉の匂」と表現しているように、本来の「薔薇の花」との違いに「気づかなかつた」のであり、本来の価値と違うものを見出しているのである。

次の「十九 人工の翼」の中で「ルッソオには近づかなかつた。」と述べ、その理由を、「それは或は彼自身の一面、——情熱に駆られ易い一面のルッソオに近い為かも知れなかつた。」とするが、「かも知れなかつた」とあるように、ここでも自分自身のことでありながら明確なものではない。ルッソオは生後八日にして母を失い、七歳頃から父とともに小説や歴史の書物を読む。ルッソオに近づかなかつたのは、母の発狂という実母不在の自分と似通っているためと考えることもできる。「ヴォルテール」は、ルッソオとは対極の立場に立つ。人間の理性を信頼し、自由を信奉した自由主義の象徴である。そして、「人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。」が、その知性によって「人工の翼を供給し」飛び立つ。しかし「同時に又理智の光を浴びた人生の歓びや悲しみ」という感情は忘れられていく。「人工の翼」によって、自らの創作のために「遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。」のであろうが、飛ぶことだけを目的に作られた「人工の翼」は「太陽の光りに焼かれた為にととうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。」なるのである。

さらに「三十三 英雄」では、「ヴォルテール」により「人工の翼」を得ながらも「高い山を見上げてゐた。」のである。「氷河の懸つた山の上には禿鷹の影さへ見えなかつた。が、背の低い露西亜人が一人、執拗に山道を登りつづけてゐた。」のである。「背の低い露西亜人」は「高い山」を目指し「山道を登りつづけて」いるレーニンである。改革者として人工の「電気機関車」と讃えながらも、「草花の匂のする」と、自然漂う素朴さも兼ね備えた「僕等の東洋が生んだ」人物として誇りに感じているのである。

最後「四十五 Divan」は、ゲーテの詩集である。それによって「もう一度彼の心に新しい力を与へようとした。」のである。「彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲーテを見、絶望に近い羨ましさを感じ、「詩人ゲーテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた。」と敬意を表している。「クリスト」よりも偉大だと感じているのは「詩人ゲーテ」だからである。そして、「若しこの詩人の足あとを辿る多少の力を持つてゐたらば、」と感じているが、年齢的に、もはやそれができないのである。その思いを「しみじみ生活的宦官に生まれた彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた。」と述べている。「生活的宦官」とは芸術よりも生活の為に生きることを強いられた人生のことである。

⑧ 「或阿呆の一生」の執筆 「四十九 剥製の白鳥」

この章は、海老井氏（先掲書）の中で『四十八 死』までの形で完成していたと考えられる。（四五頁）と述べ、『剥製の白鳥』こそ、芥川の最期の自画像だといつてもよいであろう。（中略）すでに彼の前には、『発狂』か『自殺』かの二者択一しかない。（四七八頁）と指摘している。「或阿呆の一生」を書き上げた後の心情が語られていることから納得のできる見解であり、この章で「或阿呆の一生」は一度完成したが、その後書き足されて五十一章になり、完成したと考えられる。また、この章のような「或阿呆の一生」執筆についての言及は、他の章には見ることができないのである。この章は、独立する五十一章の断章から一つの作品として完成させるための枠組みがされていると考えられ、重要な役割をしている。

まず「彼は最後の力を尽し、彼の自叙伝を書いて見ようとした。」と執筆の意欲が直接的に語られるが、試みた結果、「それは彼自身には存外容易に出来なかつた。それは彼の自尊心や懷疑主義や利害の打算の未だに残つてゐる為だつた。」と容易にできない理由について明らかにしている。これらのことから彼は「自尊心や懷疑主義や利害の打算」を捨てたつもりでいたが、書き始めることによって「未だに残つてゐる」ことに気づくのである。そして、「彼はかう云ふ彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた。」と語っている。言い換えれば、「或阿呆」とは言いながらも、「阿呆」にはなりきれないというのであるが、それは作者の意見である。逆説的に言えば、それだけ作者が自叙伝を書くということを意識していたと考えられる。苦心した心情を語り、「誰でも一皮剥いて見れば同じことだ」と考え、「文芸上の作品に必しも誰も動かされないのは彼にはつきりわかつてゐた。」と自分を慰め、「彼の作品の訴へるのは彼に近い生涯を送つた彼に近い人々の外にある筈はない。」と、自叙伝を理解してもらえらる人を自らが限定している。そのうえ、自分に言い聞かすようにゲーテの書いた自叙伝「詩と真実」とに照らし合わせながら、「書いて見ることにした。」と語っている。『詩と真実』と云ふ本の名前は彼にはあらゆる自叙伝の名前のやうにも考へられ勝ちだつた。」と「詩」は虚構的な要素も含んでいるが、「詩」は虚構も含めた「真実」である。彼にとつて「詩と真実」との意味は大きく、「告白」することが容易でないことを物語っているのである。最後に『或阿呆の一生』を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剥製の白鳥のあるのを見つけた。」と具体的に「書き上げた後」であることを明らかにして感想を述べる。「剥製の白鳥」は、生命を失つた飛ぶことができない白鳥であり、言わば歳月の中で、「黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた。」のである。「彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだつた。」の

であり、「或阿呆の一生」を書き上げ、彼のすべきことは、もはやない。ただ「徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。」のである。自叙伝を「容易に出来なかつた」と自己弁護しているが、「或阿呆の一生」を執筆することは、作家芥川としての「詩と真実」という自叙伝を書くこととしていた意欲がわかる。この「決心」の内実は、「運命を待つこと」ができるということから、自叙伝を書き上げた彼にすべての満足感を感じられる。

⑨ 人生観

「一時代」、「五十一敗北」

冒頭の「一時代」であるが、「或阿呆の一生」において、この章は創作を含めた人生観そのものであり、重要な意味をもつ。作品がこの章から始まる意味は大きい。「二十歳の彼」が「日の暮」の中、「登」ってきたのは「西洋風の梯」である。「薄暗がり」と戦ひながら「は、彼の人生そのものを象徴させ、「登」ってきたのも、完全に「西洋」のものではなく、「西洋風」でしかない。しかも、西洋を象徴する「階段」でもなく、日本的な「梯子」なのである。これまでの人生を振り返り、「二十歳の彼」が西洋人から多くのことを学んだのである。しかし、「西洋風」と表現していることから、自らの人生を顧みて、目指してきたものと実際に歩んできた道との違いが生じている。「薄暗がり」と戦ひながら「であつた人生の模索を終え、「とうとう根気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。」時、「傘のない電燈」が灯される。「傘のない」ため、「電燈」は、一部を映し出すのではなく、全体を映し出している。そして「西洋風の梯子」を始めは「登つて」来たが、最後は「下りよう」としている。「梯子の上に佇んだまま」彼の視線は「本の間に動いてゐる店員や客を見下し」、「店員や客」を「妙に小さかつた」、「見すばらしかつた」と感じながらも、「西洋風の梯子」を登ってきた自分の人生を肯定しているのであるが、同時に「傘のない電燈」によって、自分の姿も見つめていくのである。このように彼と「店員や客」を見下しながら、冷静に自分自身を見つめ、なおかつ少しでも自分の人生の価値を見出そうとする姿を読み取ることができる。だからこそ、「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」と人生と詩の一行を対比し、文学の価値を賛美するのである。また、「西洋風の梯子」を「下りよう」としていることは、作家生活を閉じることを意味すると同時に、自分の人生を閉じることを意味するのである。

二十歳は、東京帝国大学在学中で、第四次『新思潮』を創刊し、作家としてのスタートを切った頃である。自分の人生を客観的に見つめる視点から作品は始まる。その視点は死を前にして、自分の中では、既にすべてのことが完結しており、自ら

の終焉をした生涯を顧みているのである。重要なのは、「阿呆」という言葉が示すように、自らを卑下する態度を全面的に明らかにしているが、自分の一生を語る最初に、一行の詩を賛美する心情を述べ、文学に最高の価値があることを前提に「或阿呆の一生」が始まっていることである。

「五十一敗北」の章が最終章である。「四十九剥製の白鳥」が執筆の心情を語っているのであれば、この章は執筆している彼の現状を語っているといえよう。しかも、自叙伝とは言いながらも、極めて客観的に描かれている。「容易に出来なかつた」ものを書き上げた満足感とはほど遠い。「ペン」を執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。」のである。最後の章が「敗北」であり、自分を取り巻く状況、時代に敗北したとされ、さらに、宮本顕治氏「敗北の文学」芥川龍之介氏の文学について『改造』昭和四・八の指摘にもあるように、「自我」の問題を徹底的に追求しながらも、知識人が時代の波の中で翻弄されて滅んでゆく行程に、知識人の悲劇や大正文学の終焉を読み「芥川文学の敗北」という読みが現在、通説化されつつある。しかし、ここでの敗北は創作上ではなく、身体的なものによる敗北ではないようにも感じる。

「彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。(中略)彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまつた、細い剣を杖にしながら。」とあり、「ペン」を「刀」に例えているが、「刃のこぼれてしまつた」「細い剣」は、もはや作家として戦えないことを意味する。つまりは創作できないのである。但し、戦わなければ、刃がこぼれることもなかった。彼は、自分を取り巻く様々なものと格闘したのである。換言すれば、生涯戦い続けたからこそ結ぶことのできる表現ではなかつたのか。しかし、「ペン」は「細い剣」にすぎず、戦うためには十分な「剣」ではなかつた。そのうえ、今は「杖にしながら」と綴りつつも、この後、死を選択する。即ち、自分の人生を支え、歩くための「杖」としての役目も十分には果たさなかつたのである。これまでは「ペン」により生活を支えてきたが、もはや「ペン」は自分が生きて行くうえでの支えとしての「杖」にもならないのである。「杖」は、歩いているからこそ必要なものである。従つて、章題や自殺などの要因から「敗北の文学」と位置づけるだけではなく、「刃のこぼれ」るほど、作家として勇敢に戦い続けた姿を読み取ることも大切なのではないだろうか。

以上ここまで考察してきた九項目の「(1)内容別の分類」は、それらの内容を「①実母」、「②養父母・伯母」は「家に関すること」、「③女性関係」は「女性に関すること」、「④身近な出来事」、「⑤生活・病・死」は「自分に関すること」、「⑥創作」、「⑦人物」、「⑧「或阿呆の一生」の執筆」、「⑨人生観」は「創作に関すること」の四つに大きくまとめることができるのである。

芥川龍之介「或阿呆の一生」論
—作家としての「告白」—

(学術論文)

Ⅱ 作品全体の考察
(1) 特徴的な表現一覧表

章 題	年 齢	分 類	暗	明	その他の明暗・天候	嗅覚・聴覚	植物・生物	乗り物・道・他
一 時代	二十歳	⑨ 人生観	日の暮・薄暗がり	傘のない電燈				
二 母	十年前に	① 実母				彼等の臭気に彼の母の臭気を感じた		
三 家	二十歳	② 養父母・伯母						
四 東京		② 養父母・伯母	どんより曇つてゐた。				桜	小蒸汽・いつか
五 我		⑦ 人物・日本人		絶えず巻煙草をふかしてゐた。			緒い鉢に植ゑたゴムの樹	自動車
六 病		⑤ 生活・病・死			絶え間ない潮風の中		椰子の花	
七 画	二十三歳	⑥ 創作	或雨を持つた秋の日の暮				木の枝のうねり	いつか・荷馬車
八 火花		⑥ 創作		紫いろの火花・凄まじい空 中の火花	雨に濡れたまま・雨は 可也烈しかった雨の中	ゴム引の外套の匂 腐敗した杏の匂に近 い死体・臭気		アスファルト・歩き ながら いつの間にか
九 死体		⑥ 創作					大きい樫の木の下・樫の木	
十 先生		⑦ 人物・夏目漱石		秋の日の光の中			篠懸が一本・か細い黒犬が一匹	車・犬・いつか
十一 夜明け	二十五の年	⑦ 人物・夏目漱石		星は次第に明けて行つた。 ・巻煙草に火をつけ・		かすかに匂つてゐる 阿蘭陀芹		艦・航艇・小さい軍 艦・金剛
十二 軍港		⑥ 創作	薄暗かつた	明るい軍港の風景				
十三 先生の死		⑦ 人物・夏目漱石	煙草はまだ薄暗かつた・巻 煙草に火もつけずに・薄 い煙		雨上りの風の中・雨上 りの風	工場の唄・何か高い 声にうたつてゐた	松山	午前六時の上り列 車・ブラツトフオオ ム鉄道
十四 結婚		② 養父母・伯母					黄水仙の鉢	
十五 彼等		② 養父母・伯母				薔薇の葉の匂	大きい芭蕉の葉	汽車
十六 枕		⑦ 人物・西欧人						いつか
十七 蝶		③ 女性関係・全般		数年後にもまだきらめいて ゐた。		薔薇の葉の匂	蝶が一羽ひらめいてゐた・蝶の翅	いつか
十八 月		③ 女性関係・月の 光りの中		月の光りの中	かう云ふ昼にも	中		
十九 人工の翼	二十九歳	⑦ 人物・西欧人	もう少しも明るくはな かつた。	理智の光・太陽の光り			人工の翼	
二十 械		② 養父母・伯母						
二十一 狂人の娘		③ 女性関係・狂人 の娘	人気のない曇天		潮風	磯臭い墓地	蛸殻	二台の人力車・田舎 道
二十二 或画家		⑦ 人物・日本人	或薄ら寒い秋の日の暮				一本の唐黍・高い唐黍・細ぼそと 根を露はしてゐた・一羽の雄鶏の 墨画	
二十三 彼女		③ 女性関係・月の 光りの中	暮れかかつてゐた。	銀色に澄んだ空・窓々の電 燈をきらめかせてゐた。薄				歩いて行つた・自動 車
二十四 出産		④ 身近な出来事		明い広場・月の光の中		鼠の仔に近い赤児の 匂・高い声		

(学術論文)

21

(2) 特徴的な表現

作品全体を視野に入れ、「特徴的な表現一覧表」を中心に「或阿呆の一生」に見られる特徴的な表現を分析しておきたい。括弧で章題番号のみ示し、章題は省略する。

まず、作品全体に描写される「暗」と「明」の明るさに関する表現に特徴が見られる。⁸ 光のない「暗さ」ではなく、「薄暗い」などのように、曖昧な表現において十分でない「明るさ」で表現されていることが多い。例を挙げると次のような表現である。それは冒頭の「日の暮」・「薄暗がり」(一)から始まり、最終章の「唯薄暗い中」(五十一)までである。内容別に見ても、「家に関すること」では、冒頭に加え「どんより曇つてゐた」(四)、「女性に関すること」では、「人気がない曇天」(二十一)、「暮れかかつてゐた」(二十三)、「自分に関すること」では、「薄暗かつた」(十二)、「或雪曇りに曇つた午後」(四十一)、「窓格子の外はまつ暗」・「暗の中」(四十四)、「日の暮のやうに薄暗かつた」(四十六)、「創作に関すること」では「或雨を持つた秋の日の暮」(七)、「薄暗かつた」(十二)、「空はまだ薄暗かつた」・「巻煙草に火もつけずに」・「薄い煙」(十三)、「もう少しも明るくなかつた」(十九)、「或薄ら寒い秋の日の暮」(二十二)、「日の暮の往来」(四十九)、「薄暗い中」(五十一)のように、一定の内容に限定されているわけではなく全体にわたっている。このように完全に「明るい」とは描かれず、「薄暗い」などの表現により、十分な明るさに満たされていない。

次に注目したいのが、この「薄暗さ」と対比する「光」についてである。作品の根底に流れる「薄暗さ」とは対照的に、作中には「光」にまつわる描写も多く見られる。例を挙げれば、「傘のない電燈」(二)、「絶えず巻煙草をふかしてゐた」(五)、「紫いろの火花」・「凄まじい空中の火花」(八)、「秋の日の光の中」(十)、「夜は次第に明けて行つた」・「巻煙草に火をつけ」・「星」(十一)、「明るい軍港の風景」(十二)、「数年後にもまだきらめいてゐた」(十七)、「月の光りの中」(十八)、「理智の光」・「太陽の光り」(十九)、「窓々の銀色に済んだ空」・「電燈をきらめかせてゐた」・「薄明い広場」・「月の光の中」(二十三)、「月明りの中」・「背の低いランプの下」(二十五)、「月の光の中」(二十七)、「日の光りの中」(二十八)、「不相変月の光の中」・「一本の巻煙草に火をつけ」(三十)、「炎天」(三十一)、「雨を持つた空の下に赤光りに花を」(三十二)、「明るいランプの下」(三十三)、「噴火山」(三十六)、「かがやかしい雲」(三十七)、「巻煙草に火をつけ」・「巻煙草を吸ひながら」(三十八)、「火のついた葉巻」(四十一)、「春の日の当つた松林の中」(四十二)、「薄明りの中」・「沖の稲妻」(四十三)、「朝日の光の薄氷にさしてゐるやうだつた」・「かがやかしい顔」

(四十七)である。これらの描写は、大半は「薄暗さ」の中で同時に描写され、作品全体が「暗」だけでなく、その中に「明」を描写することで、より彼の人生の明暗を象徴的に表現しているのではないだろうか。このように「薄暗い」などの表現が全体的に見られ、希望の光を見出すことはできないが、唯一、光を放つのは創作に没頭した頃の「紫いろの火花」(八)である。さらに、明確なのは、漱石のことである。漱石との出会いを「秋の日の光の中」(十)と描写し、文壇で認められた喜びを「夜は次第に明けて行つた」・「巻煙草に火をつけ」と綴り、「星」(十一)は輝いている。漱石の死の報には、「雨上りの風の中」・「空はまだ薄暗かつた」・「巻煙草に火もつけずに」・「薄い煙を靡かせながら」(十三)と描写されている。これらのことから漱石への思いを端的に知ることができる。また、これらの描写は、実際の天候などをそのまま描写したものではない。「女性に関すること」で述べたように、「かう云ふ昼にも」・「月の光りの中」(十八)に感じるように感じたり、「雨の中」・「不相変月の光の中」(三十)にしていると感じていることから明らかに作品中の風景は心象風景なのである。人生における「明」は「暗」の裏返しでもあり、「明」は「光」、「火」、「天候」などによって描写されている。

そのうえ、それらの描写は天候などと合わせて「雨」にまつわる描写も多く、「或雨を持つた秋の日の暮」(七)、「雨に濡れたまま」・「雨は可也烈しかつた」(八)、「雨上りの風の中」(十三)、「雨ふり」・「雨の中」(三十)、「雨を持つた空の下」(三十二)のように表現される。さらに天候について、雨の描写が多ければ、それに伴う形で「風」の描写も見られる。例を挙げれば、「絶え間ない潮風の中」(六)、「雨上りの風の中」(十三)、「藻の匂の満ちた風の中」(十七)、「潮風」(二十一)である。これらのことから、冒頭章から最終章にわたる「薄暗さ」は、「一生」を振り返った時に思い出す心象風景である。作品の分析でも考察したように、完全な「明るさ」で象徴されるものではなく、「薄暗い」と表現することが、最も主人公の心情を明確にするものである。そして、その作品の根底に流れる基調は晴れ渡る晴天でもなく、時には雨が降り、風を伴う人生だったのである。

その他、作品中に多く表現される嗅覚である。各章での考察では必要に応じて触れたが、例を挙げると次のようである。「彼等の臭氣に彼の母の母の臭氣を感じた」(二)、「ゴム引の外套の匂」(八)、「腐敗した杏の匂に近い死体」、「臭氣」(九)、「かすかに匂つてゐる阿蘭陀芹」(十二)、「薔薇の葉の匂」(十六)、「藻の匂の満ちた風の中」(十七)、「磯臭い墓地」(二十一)、「鼠の仔に近い赤児の匂」(二十四)、「牛の糞の臭氣」・「香ばしい匂」(二十八)、「熟し切つた杏の匂」・「炎天に腐つた死骸の匂」(三十一)、「草花の匂」(三十三)である。「狂人」の臭氣、潮臭さ、馬糞の匂い、死骸の匂い、あまりよい匂いは描写されていない。それぞれの章におけるこれらの嗅覚

は、自らが積極的な行動により感じるものではない。常に受動的に、自らが感じてしまうものであり、あまり良い匂いを感じていないということは、それぞれの対象についても、自然に負の要素を感じ取ってしまっていると考えられるのである。

また、嗅覚は多く描写されるが、聴覚による描写は極めて少ない。描写されるのは、「工夫の唄」・「何か高い声にうたつてゐた」(十三)、なぜ生まれてきたのだろうという産声の「高い声」(二十四)、モーツアルトの「蓄音機」から流れる音楽(四十一)、「荒あらしい鶏の声」(四十四)のみである。これらに共通するのは、負の要素の場面に描写され、闇に包まれた嗅覚の作品世界を変化させるかのように描写されている。

さらに、作品中には各章で考察したように、象徴的に植物も多く描写される。頻出する植物については、植物の特性などが、作品世界に効果的に生かされている。また、乗り物や道などの描写も見られる。乗り物は「汽車」、「自動車」、「潜航艇」、「人力車」、それに「一台」や「二台」の場合がある。道は「アスファルト」もあれば「田舎道」もある。「或阿呆の一生」を、彼の人生の縮図と考えた時、まさにそれは自分の歩いた道のりを反映しているという読みも可能かもしれない。

最後に「いつか」、「いつの間にか」という表現も多く見られ、十三章、作品全体の四分の一に及ぶ。回想形式で、当時のことを振り返るものの、不確定な表現であり、現在の心情が大きく反映されている。「いつか」、「いつの間にか」は、当時から認識していないことなのか、忘れてしまったのか明らかではない。最終的には、執筆時に気づくが、その結果に至る経過についても自分自身のことでありながら、不確定な要素であり、覚えていないことのように表現している。一方、これらの表現によって、回想する形式を意識したことも明らかである。少なくともこのように表現することで、過去の出来事をあえて明確にしないのである。つまり、この曖昧な表現によって、結果的には自分の知らない間の無意識な感情も表現することが可能になっているのではないだろうか。⁹⁾

(3) 作品の構造

作品の構造を明確にするために章題、配列、構成の三つの視点から考察を試みた。まず章題について、関口安義氏「作品論『或阿呆の一生』」(『解釈と鑑賞』昭和五七・三)は、次のように指摘している。

それぞれの題名に、どれも印象的な短い語が選ばれていること、次に「一時代」「二母」「三家」「四東京」と主人公の生きた時代や家や場所が示され、配列がほぼ年代記的の自伝形式をとっていること、第三に「十三先生の死」「十四

結婚」「二十四出産」「三十一大地震」など事実と結びついた題名の立て方と、「五我」「八花火」「十一夜明け」「十九人工の翼」など象徴的意味が込められた題名の立て方との混在が認められること、さらには細かなところで「六病」「四十一病」、「四十四死」「四十八死」と題名のダブリがあることなどだ。

章題については、指摘されているように、「家」、「東京」といった具体的な場所、「結婚」、「出産」といった人生における重要な出来事、「大地震」など実際の出来事、「枕」、「蝶」、「月」、「雨」などの具体的な名詞、そして、「古代」、「形」、「色彩」などの抽象的なもの、また、「死体」、「殺人」、「死」、「病」などの精神的な苦痛を伴うもの、さらには「復讐」、「敗北」といった心情的なものなど様々である。章題は、各章の内容をわかりやすくするために付けられることが多いと考えられるが、「或阿呆の一生」については、章題だけでは内容が想像できず、作品を読むことで章題を初めて理解することができる。例を挙げると、「十四結婚」において、この章題を読む限りでは、結婚生活自体について語っていると考えるが、実際は、結婚生活が伯母によって支配されていたこと、つまり、結婚生活というよりも伯母のことが語られている。このように各章の内容と章題が完全に一致するのではなく、内容に重点が置かれており、内容をより印象付けるのための章題ということができよう。その意味からすると本文が書かれた後、それに相応しい章題が付けられていると考えられよう。また、「彼女の顔はかう云ふ昼にも、月の光りの中にあるやうだつた。」と描写される女性については四つの章で描写され、それぞれに章題がある。最初の二つの「十八月」、「二十三彼女」について問題はない。しかし、残りの「二十七スパルタ式訓練」は彼女の存在を友人に知られないように誤魔化した時のことであり、自分にとってそれが厳しい「スパルタ式訓練」と感じたのであろう。その感情を章題にしている。しかも、最後の「三十雨」は、月に喻えられる女性にとつて、月に繋がるものでなく、「雨」であつても「不相変月の光の中にあるやうだつた。」のであり、それだけ彼女の存在をより強調するかのような章題が付けられている。さらに「火あそび」と「死」のように、章題がまったく違っているにもかかわらず、書かれている内容について連続しており、配列も四十七、四十八と連続している。

章題の付け方については法則を見出せず、混在するというのが、正しいと考える。その各章の内容に応じて、相応しいと思える章題を付けている。換言すれば、各章の伝えたい思いをより強く伝えるために章題が付けられているということである。その付け方は、アフオリズムである「侏儒の言葉」(『文藝春秋』大正一二・一)大正一四・一一)の章題の付け方と同様とも考えられる。そのうえ、「題名のダブリがあること」を指摘しているが、「病」、「死」の二章はそれぞれ、一つの内容にまと

められるものではなく、たまたま同じ章題がついているが、それぞれ独立した章と考えられる。つまり、「病」は「二十歳」と「三十歳」、「死」は二度とも「三十五歳」であるが、即ち、それぞれの章は、年齢の違いによる別々の意味を伝えるために必要なのである。

次に作品の配列についてである。関口氏は先掲論文の中で「彼の夢——自伝的エスキス——」と題された本作が、物理的時間の流れのままに五十一の短章に書き継がれたのではなく、折々に書き留められた一章一章を集め、順序だて、体系化されたことを物語る。」と述べているように、作品の配列は、「二十歳」、「二十三歳」、「二十五歳」、「二十九歳」、「三十歳」、「三十五歳」と年齢別に並べられている。また、原稿の章題の番号が何度も訂正されていることから、各章は芥川の人生に沿って書かれたのではなく、各章が単独に書かれ、それを芥川の人生と重ねて並び替え、「或阿呆の一生」の中で配列したと考えられる。即ち、「一生」に起こったことを順に配列し、その年齢の時の出来事及び自らの心情を明確になるように配列されている。このように順を追って、その年齢の時の自分を語ることは、自伝的な作品になることを意識しているであろう。

最後に作品の構成についてまとめておきたい。冒頭に続いて、各章は単独で書かれている。まず、実母のことである。何よりも自分の生涯を決定づけた大きな出来事であろう。次に養父母のことが書かれている。このように最初の「二母」と「三家」、「四東京」と続く章の、実母、伯母、そして養子先のことへ続くことは、芥川の生い立ちを考えた場合、連想の中で繋がっており、計算されたものである。また、冒頭の「一時代」と収束部の「五十一敗北」では明らかに関連性があり、作品の構造において枠組みが作られている。海老井氏(先掲書)の指摘にもあるように「四十九剥製の白鳥」の章での完成を考えていたと思われるが、付け加えられた二章の意味は大きい。「一時代」では自分の人生を客観的に見つめ、「五十一敗北」では作家として戦い、敗れた姿を描写している。次に二十歳から作品が始まっている点については、「一時代」の章の内容から考えれば、二十歳からの作家として生きた人生が彼の人生そのものであり、だからこそ、人生を回想した時、人生と「ポオドレエル」を比較するのである。作家人生をスタートさせる二十歳以降の人生が、彼の「一生」の始まりである。各章は別々に書かれ、年齢別に配列されていると述べたが、作品の構成も意識されている。例えば、「三十七越し人」と「三十八復讐」とが並べられているが、二人の関係が対等であるか否かという点で、配列も意図的であろう。また、「五我」は「彼は彼の先輩と一しよに或カツフェの卓子に向ひ、絶えず巻煙草をふかしてゐた。」であるが、「四十一病」は「十戒を破つたモツツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかししもや彼のやうに、……彼は頭を

垂れたまま、静かに彼の卓子へ帰つて行つた。」のである。このようにそれぞれの「卓子」の登場する場面が描写されているが、「カツフェの卓子に向ひ」と、「静かに彼の卓子へ帰つて行つた。」の二つの表現に相違を感じる。前者は自分以外の他者と相対し、また後者は自己の内面を凝視している。この二章は作品中では前半と後半に配列され、よって年齢も違う。言わば小道具のような「卓子」の場面であるが、それぞれの心情によつて、描き分けられており、年齢とその時の心情を意識した作品全体の構成を視野に入れたからであろう。このように五十一章に別れる各章は、単に分裂した章を年齢によつて配列したものではない。内容的にも作品の細部まで意識して構成されている。何よりも作品の構造で特筆すべきことは、その時々、象について自分の心情を交えて綴る「侏儒の言葉」に見られるようなアフォーリズムの形式である。この形式により一つのテーマに沿って表現するのではなく、それぞれの章が単体として表現することができる。このような方法によつて、これまでとは違う表現を可能にしている。一つの物語としての自伝的な作品として「一生」を語ることは不可能であるが、アフォーリズムの形式のように断章を組み合わせるることによつて、「告白」を可能にしたのではないか。即ち、切り取り、それをその時に起こったであろう出来事に貼り合わせることで「或阿呆の一生」は完成したのである。

(4) 作品における「彼」の設定

「大導寺信輔の半生」(『中央公論』大正一四・一)及びこれまでの作品における主人公については、「僕」と表記され、「僕」を主語として主観的に心情を吐露してきた。しかし、それらの方法については、「堀川保吉」なる人物を設定したり、「大導寺信輔」を設定したりと様々であったが、「或阿呆の一生」において初めて、「彼」を主人公とする。「二」から「三」の章で例を挙げると、「一時代」に「二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新らしい本を探してゐた。」「二母」では「彼は血色の善い医者としよにかう云ふ光景を眺めてゐた。」「三家」には「彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしてゐた。」と、各章の冒頭及び冒頭近くに「してゐた。」という過去形で、「彼」の様子が描写される。この表現形態は、ほぼ作品全体にわたり、回想形式であることからこのように描写される。一方で、「一時代」では「彼はとうとう根気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。」や「二母」では「彼は実際彼等の臭気に彼の母の臭気を感じた。」「三家」では「彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。」とある。「語り手」が「彼」の心情を語っている。本来であれば、「彼」ではなく「僕」の方が心情を語るには相応しいはずである。「彼」と「語り手」とは、そのままイコールではなく、別々の人物が存在するように感じる。様

子を語るとは表面的で、外からでも語るとは可能であるが、やはり心情となると、「語り手」が「彼のやうに」語っていることになる。それは本当に「彼」に則しているのかと、疑いたくもなる。続いて、そのような心情を挙げてみよう。「三十五道化人形」では「彼はいつ死んでも悔いのないやうな烈しい生活をするつもりだった。」と理由が明確にされ、「つもり」という曖昧な感情を述べている。「四十三夜」では「彼はかう云ふ空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には飲びだつた。が、同時に又苦しみだつた。」と複雑な心情を語る。「十三先生の死」でも「彼は巻煙草に火もつけずに飲みに近い苦しみを感じてゐた。」であり、彼の複雑な心情は理解できるが、正確な心情はわからない。「十八月」では「彼は彼女を見送りながら、(彼等は一面識もない間がらだつた。)今まで知らなかつた寂しさを感じた。……」では、状況を語りながら、「彼」の心情は深く描写されていない。一方で、「彼」の包み隠さない憎悪が顕わになった。直線的な感情が描写された箇所も見られる。「三十八復讐」では、「彼は黙つて目を反らした。が、彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、残酷な欲望さへない訣ではなかつた。」と「狂人の娘」、の激しい感情が読み取れる。さらに「語り手」は、次のようにも語る。「四 東京」では「彼はその桜に、——江戸以来の向う島の桜にいつか彼自身を見出してゐた。」のように、「彼」の複雑な深い内面を示唆している。また、「九 死体」では「彼の答は心の中にあつただけだつた。」と「彼」の心の中までも描写する。しかも「三十四 色彩」では「彼はふと七八年前の彼の情熱を思ひ出した。同時に又彼の七八年前には色彩を知らなかつたのを発見した。」と、過去の心情まで思ひ出している。最後に特殊な表現を二例挙げておきたい。「四十一 病」では「十戒を破つたモツツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかしよもや彼のやうに」と、ここでは語らないことで「彼」の苦しみを伝えている。また、「二十一 或画家」では「かう云ふ発見は彼を憂鬱にするだけだつた。『もう遅い。しかしいざとなつた時には……』と語り手により心情を述べながらも、さらに直接的に「彼」が語っている。

以上のような例から「僕」と「彼」の場合の相違を考えてみたい。「僕」は一人称であり、「語り手」も「僕」自身である。「僕」が直接「聞き手」に語る。一方、「彼」の場合は三人称であり、「或阿呆の一生」では、本来一人称で表現すべきところを、三人称の「彼」が主語になっている。「聞き手」からすれば「語り手」本人が直接自分を語るのではなく、別の人物が介在するように聞こえてくる。そして、その人物が「彼」の様子や言葉を「聞き手」に伝えることになる。言わば、「彼」のことを伝える「別の視点」が存在することになる。即ち、「僕」はそのまま直接伝わるが、「彼」は間接的に「聞き手」に伝わるのである。必然的に「語り手」と「聞き手」の間に距離ができることになる。言い換えれば「僕」は、自分の直接的な言葉であるが、

「彼」は、語っている内容が直接でない分、そこには憶測であったり、曖昧な部分、場合によっては想像による部分もあるため、齟齬が生じる可能性もある。「彼」を見ている人物が存在する「或阿呆の一生」の場合、「彼」は「或阿呆」であることから、この「別の視点」は、「彼」の様子を伝えようとする人物ということになる。

「序文」でも明らかなように、執筆時の心境、告白的な要素が強いはずである。しかし、「或阿呆の一生」は、執筆時の〈告白〉だけでなく、過去の出来事を回想しながら当時の心境も同時に語っている。そこには「僕」のように直接的な〈告白〉は見られず、客観的、間接的といった印象を持たざるを得ないのであるが、語る出来事にも時間差があり、客観的に描写することも必要だったのであろう。つまり、「彼」の設定によって、両者の時間の壁が取り払われている。「僕」という主観的な表現ではなく、「彼」という「語り手」と距離を取る人物を主人公として設定することによって、直接的な〈告白〉を避けることができ、「彼」の設定は、最も〈告白〉に適していると言えよう。「或阿呆の一生」の全体に「彼」が使用されていることから、〈告白〉を可能にする目的で「彼」を主人公として設定したといえる。また、「彼」を主人公にすることによって、客観性が増し、事実の再現という意味では、より信憑性も高い。人生における場面の一つを切り取っているかのような意味である。即ち、三人称にすることで、真実としてそれらの出来事がより明確に伝わる、そんな効果も見られるのである。言わば「彼」を設定する〈告白〉によって、芥川はこれまで得られなかつた説得力のある〈告白〉を手に入れたのである。

〈告白〉とは内面の吐露だけを指すのではなく、自らの身に起こった出来事を語ることもである。そしてそれが真実であること、その意味では「或阿呆の一生」も直接的、間接的の相違はあるが、〈告白〉の一つである。さらに、先述した作品構造の形式がアフォリズムのような形式であることも、「彼」を設定した客観的な〈告白〉には有効である。その当時の出来事を語る〈告白〉方法とは相性が良い気がする。この表現形式が芥川にとつては大切であつたのである。「彼」の設定によって、「語り手」との距離が生まれ、客観性が増している。しかし、三人称を使っているが、表現されている内容は主観的である。「或阿呆の一生」は、そのような〈告白〉の試みであつた。言わばこれまで試みてきた〈告白〉の中でも、芥川の考える〈告白〉の多様性を試みた実践と考えることもできる。また、それに加えアフォリズムの形式は、その場面ごとの心情を語る方法として、芥川には適しており、この二つによって、芥川独自の〈告白〉を手に入れたのではないだろうか。

(5) 「序文」の意味

内容別に考察してきたが、これらの分類の何れにも属さない序文についても考察しておきたい。日付は「六月二十日」である。この序文はおそらく「或阿呆の一生」の執筆後、書いたであろう。言わば、本文に対する「あとがき」のようなもので、この芥川の言及は作品の理解に大いに役立つと考えられるため、全文を引用する。

僕はこの原稿を発表する可否は勿論、発表する時や機関も君に一任したいと思つてゐる。君はこの原稿の中に出て来る大抵の人物を知つてゐるだらう。しかし僕は発表するとしても、インデキスをつけずに貰ひたいと思つてゐる。僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしてゐる。しかし不思議にも後悔してゐない。唯僕の如き悪夫、悪子、悪親を持つたものを如何にも気の毒に感じてゐる。ではさやうなら。僕はこの原稿の中では少くとも意識的には自己弁護をしなかつたつもりだ。(傍点芥川)

最後に僕のこの原稿を特に君に托するのは君の恐らくは誰よりも僕を知つてゐると思ふからだ。(都会人と云ふ僕の皮を剥ぎさへすれば)どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ。

昭和二年六月二十日

芥川龍之介

久米正雄君

ここでまず、注意しておかなければいけないのは、他の五十一章とは違い、「彼」ではなく、「僕」が使われていることである。「あとがき」の意味からすれば当然のことであるが、それだけこの序文には、自分自身の直接的な思いが込められていると考えることができる。本文が「彼」で統一されているだけに、序文の主観性は増大すると言えよう。

次に久米正雄へ「一任したい」という冒頭からこの序文は始まる。発表するか否か、発表時期、発表機関、すべて久米に「一任したい」という筆者の要望が書かれている。これらの内容は本来、すべて作者本人が指定することであり、他人に「一任」することではない。この作品のもつ特殊性が冒頭から明らかになっている。一任する理由を「最後に僕のこの原稿を特に君に托するのは君の恐らくは誰よりも僕を知つてゐると思ふからだ。」と述べるが、このことは久米からすれば、芥川から知つてゐると言われるからには、芥川自身の気持ちを汲んで差しさわりのないようにしなければならぬという必然性に迫られ、大いに悩むところである。久米に判断を委ねることは芥川にとって好都合なことではない。例えば最終的に問題が起つた場合、自分の意志でないと言い訳することもできるであらう。悪く言えば、芥川の責任転嫁、無責任という言い方もできる。しかし、「一任したい」と言いながら

も、芥川は、おおそ久米ならばどのように対処してくれるか、推測していたのではないだろうか。つまり、あらかじめ、久米の反応を見据えたうえでこの冒頭を書いたと言っても過言ではない気がする。だからこそ久米に託したのではないだろうか。

さらに「インデキスをつけずに貰ひたいと思つてゐる。」と要望は続く。作中には夏目漱石と西洋の作家以外、実名は使っていない。その理由は相手を完全に特定したくないから。つまり特定すれば、相手に迷惑がかかるなどの理由が挙げられる。何れにしても発表後に起きる可能性のある問題を、芥川としては回避したと考えられる。ここで重要なのは、依頼する久米に了解を得ないまま、承諾してもらえないかもしれない一方的な要望を書き、まして内容についても多くの危険性をもつ作品を、芥川はなぜ書いたのかということである。実母のことなどについて特別な〈告白〉方法を続けてきたこれまでの芥川と比べても、大きな違いである。発表されるか否か、久米に託しているが、知られることを前提として、言わば〈告白〉するたに書いている。そして、「インデキスをつけずに貰ひたい」という言葉により、この作品における〈告白〉が真実に近いことをほめかしていることになる。真実でなければ、当然「インデキスをつける」ことすらできないはずである。

続いて「今最も不幸な幸福の中」とは、どのような心境なのだろうか。一般的に考える幸福ではなく、「最も不幸な」幸福ということである。芥川特有の表現でもあり明確にはできないが、原稿を書き上げた芥川の心情を推測すれば、芥川は本当の意味での幸福を感じているのではなく、根底にある不幸は拭いきれていないのである。また「少くとも意識的には自己弁護をしなかつたつもりだ」とあるが、この表現は、無意識のうちには自己弁護をしているということを暗示しているとも考えられる。このことは作品中に書かれた〈告白〉内容について、制限を加える一方、特殊な独自なものであることを明確にしたものであると考えることもできる。つまり、〈告白〉の内容が、自己の意識を離れて真実ありのままのものか、また自己弁護が働いて真実ではないものか、全く両義に解釈できるように芥川が表現しているのである。また、「都会人と云ふ僕の皮を剥く」ことはできないため、これもすべてを知っていることにならない。表現された芥川の想いは、語りながらもどこか別の解釈をもできる、抜け道を作っているように感じるのである。最後を「どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ。」と結んでいるが、「原稿の中に」という限定は、「作家」を意識した表現であり、作家としての芥川の姿の表出でもある。つまり、「作家」として笑うのはよいが、それ以外の人間としては笑うな。」という意味にも受け取れる。このように序文を読むだけでも、この作品はそれだけ〈告白〉ということを意識した作品ということなのである。

発表時に「序文」に続いて、久米は次のような文章を載せる。

右の遺志に依り、私は此処に此の原稿を発表する。時間も場所も、最も自然な状態だと信じて。——が、其点に就て、幾らかの粗洩があるとすれば、遺霊に対して詫びる外はない。

云ふ迄もなく、是は故人の「自伝的エスキス」である。(原稿にはさう割註がしてあつて、抹消されてある。消してある文句を、茲に発表するのも如何かとは思はれるが、幾らかでもさう云ふ割註をしたい意志があつたやうに思ふので、茲に敢て補註して置く。)が、更に云ふ迄もなく、是は一個の「作品」である。私は此の発表に際して、故人が私に囑した如く、私から読者に、此の中に出て来る人物に対して、ヂヤーナリストイックな、乃至はゴシツプ的な、違ふ形式の「インデックス」は付けずに置いて貰ひたいと思ふ。

それから原稿には、左の脱字乃至は誤字と目さるべきものがある。もつとあるかもしれないが、気付いたものだけを記して置く。明に誤脱だと分つては居ても、訂正する事が出来ないのは悲しい。

以上、遺文を汚す恐れを抱き乍ら、敢て数行のプレフェースを付ける。インデックスでないから故人も許して呉れるだらう。(久米正雄識)

久米に拠れば、「ストリンベリイ」は「ストリントベリイ」、「運命を荷つた」は「運命に荷つた」、「力強い」は「力強い」などになつてゐたことが明らかにされている。既に「(3) 作品構造」の中で述べたが、関口氏(先掲論文)は

「或阿呆の一生」は、決して十分に練られた作とはいえないのである。そのことは、これを久米正雄が『改造』に発表した際に指摘していたように、自筆原稿にかなりの「脱字乃至は誤字と見るべきもの」があることもかわる。芥川はここに「自尊心や懷疑主義や利害の打算(四十九 剝製の白鳥)」を離れ、細かなことへのこだわりを捨て、自己の詩と真実の表現に向つた。しかし、もはや彼には十分に作を推敲するゆとりはなかった。

と、指摘している。「I 各章の考察」で示したように、作品自体の芥川特有の構成と細部にわたる微妙な心理描写と的確な表現は、他の作品に劣るとは思われない。まして、「誤字」、「推敲するゆとりはなかった」という指摘についてであるが、それは時間がなかっただけではないか。また、それだけ内容重視であり、「告白」を優先したからであり、「告白」することへの意識が強く、表記のことはあまり気にせず、自分が思いつくまま表現した結果の現れではなかったのか。

久米に託した意味は何か。芥川にとつて〈告白〉の問題は死ぬ間際まで自らに問

い続けたものである。作家として〈告白〉することから逃げるのではなく、常に〈告白〉については自分自身に問いかけ、その時に応じた方法で試みている。そして、これまで試みていない内容にまで最後踏み込み、完成した時、果たしてこれを発表してもよいのだろうかと思つたのではないか。そこで、自分だけでなく登場人物のことをよく知る親友、久米にその発表の是非を問う。作家として生きた芥川の遺稿である「或阿呆の一生」を親友に託す。中々できることではない。芥川の〈告白〉への決意と、お互いの友情の深さ故に実現することである。自己放棄、そして久米への自己弁護を読み取る前に、自分の作家人生のこだわりであつた〈告白〉、即ち作家としての着地点を、親友に決めてもらふと考える久米への信頼度の高さと、それに応える久米との友情の深さも忘れてはならないように思う。

III 改変の考察

(1) 題名・章題の再考察

まず、作品の題名について考えておきたい。周知のように表題については何度か訂正されている。

- ① 原題は原稿用紙二行目に「彼の夢——自伝的エスキス——」となつてゐる。
- ② その次に、それがペンで消され、その右側の原稿用紙一行目に「神話」と仮名がふられた題名がある。この時点で原題のサブタイトル「自伝的エスキス」が消えたのか残つてゐたのかは不明である。
- ③ さらに「神話」が消され、左側の原稿用紙三行目に現在のタイトル「或阿呆の一生」が出てくるのである。

原稿用紙の書かれた箇所、所謂、マス目及び行の位置からすれば、この順で変更されたことには間違いはないであろう。「エスキス(squisse)」はフランス語で下絵、スケッチ、草案などの意味である。果たしてこの変更は何を意味するのだろうか。①では、少なくとも原題には「彼の夢」の要素が含まれてゐる。しかし、各章の内容からすればそこに希望を見出せるような「夢」としての要素はない。では、書かれている内容がすべて夢であつてほしいという否定的なものなのか。もし、そうだとすれば、死を前にして書くべき作品だったのであるか。何れにしても理解できないところがある。ではどこが「彼の夢」なのであろうか。内容から考えて夢でないとするれば、この作品を書いた行為自体が「彼の夢」なのではないのか。つまり、語ろうとした内容への試みこそが、これまでできなかった夢であつたため、その実

現に芥川は夢という言葉を用いたとも考えられる。さらに、自らの執筆に対する方法だけでなく内容を振り返った時、芥川の中では、自分が考えていたよりは自己の〈告白〉ができていたのではないか。言い換えれば、それは夢ではなく、芥川からすれば、自伝として完成することができたと思っただけであろう。次に②にあるように、「神話」とすることで、その内容を事実とは違うものという意味を持たせたかったのではないか。そして、最後③のように、そのことを克服する一つの手立てとして、「自伝的エスキス」という言葉を使っていたが、「夢」、「神話」どちらも不十分と感じ、これまでの「堀川保吉」、「大導寺信輔」のように、「或阿呆」と称することによって、自分の人生を見つめ直し、卑下することでは、〈告白〉を可能にすることはできなかった。即ち、自分の事をさらけ出すためには、ここまで自分を追い詰め、罵らなければ、芥川は自分を書けなかったのである。

続いて章題についても考えておきたい。すでに「Ⅱ 作品全体の考察」「(3) 作品の構造」で章題が混在していることを述べた。ここでは原稿に着目して考えてみたい。原稿から、明確に改変している章題は二つある。一つ目は九章の「處女作」から「死体」への改変である。作品を書くために死体が必要であったことが述べられ、その「死体」がそのまま章題になっている。変更される前の「處女作」の方が、創作について彼が語っていることからすれば相応しいような気がするが、そのような直接的な表現は避けられていると考えられる。言い換えればありきたりな「處女作」という章題を意図的に回避しているという見方もできる。「處女作」と比較した場合、「死体」は、創作についてのことだとは普通は考えないであろう。しかし、「處女作」であれば、創作についての章であることは明白である。少なくとも「死体」の方が印象的な表現であり、処女作を完成させるための意気込みとその創作態度は「死体」の方がより強く印象に残るのではないだろうか。二つ目は十六章の「彫刻」から「古代」への改変である。実際は彫刻に圧倒されているが、それは現実の喜びを忘れてしまうほどの古代の魅力によるものである。その魅力は古代から現代にも通じていてスケールの大きさを感じる。その時空を超えた魅力が逆に具体性を欠き、抽象的なものになっているといえよう。このような章題の改変は、何れも、章題自体が内容を端的に表すものではなく、章題だけでは内容をわかり辛くさせている。このことから、改変することによって、「Ⅱ 作品全体の考察」「(3) 作品の構造」で考察したような抽象的な章題になっているのである。

(2) 内容別の再考察

ここでは、「Ⅰ 各章の考察」の「(2) 内容別の考察」について、分析結果を再確

認してみたい。冒頭の「一時代」の中で「あたりは暮れかかつて来た」から「日の暮は迫り出した」と改変されている。(傍線引用者、以下も同様) 自然に日が暮れ、そしてまだ完全ではなく日は残っている。「迫り出した」はその自然性を打ち破るかのように押し迫っている。死を前にしてこの作品を書く必要性に迫られている印象を受ける。しかもその後、「彼は」と続く前に「しかし」を入れ「本の背文字を読みつづけた」のであり、そのような状況下でも「読みつづけた」ことから強い信念のようなものを感じる。ましてその姿は「薄暗がり」と戦ひながら」と描写される。そして芥川の人生観を表す言葉、文学の価値を、「人生は一行のボードレールにも若くない」と述べる。原稿には「ボードレールに」と「も」がなく、入れることによって、「若くない」ことが強調されている。足元にも及ばないと表現されており、一字一句の訂正は、表現へのこだわりと考えられる。

続いて、「二母」の中で「狂人は皆鼠色の着物を着てゐた」が「狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた」に改められている。「狂人たち」と複数人に、「同じやうに」と付け足され、最後は「着てゐた」も「着せられてゐた」に変えられている。母に限定し、特別なこととするのではなく、複数存在する狂人の一人であることを述べ、しかも狂人の様子が受動的に表現されており、自分の意思での行為ではない。このことについては、「Ⅰ 各章の考察」でも述べたように、改変からも複数、受動的な表現の必要性の裏付けになる。これらのことから「狂人の意思」ではないことを表現しようとしたことがわかる。また、直接的に母が狂人であることを語らず、狂人たちの姿から間接的に母の姿を思い浮かべているのである。

さらに「二母」の中で、「彼の母も十年前には彼等と変らなかつた。」について、「彼」と書きかけ、「少しも」に書き変えられ、「彼の母も十年前には少しも彼等とは変らなかつた。」に改変されている。後の「少しも」と合わせても、母の様子を表現することから逃げてはいない。一方、伯母についてはどうか。「二家」の中で「彼は喧嘩をしても愛を感じてゐた。」から「彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。」と改変されている。「喧嘩をしても」という表面的な行動で表現して「愛を感じてゐた」ことを述べるのではなく、「誰よりも」が付け加えられ、伯母への愛が最上級のものであることを示している。また、「何度も互に愛し合ふものは苦しめ合ふのかを考へたりした」の描写でも、原稿では「何度も」を一度書いて消した後、もう一度書いてることから、よく考えたうえで、伯母の影響の大きさを身に染みて感じている気がする。

次に「五我」では、「それは彼には彼の知らない世界へ、——神々に近い『我』の世界へ彼自身を解放した。」から「その言葉は彼の知らない世界へ——神々に近い『我』の世界へ彼自身を解放した。」に改変されている。ここでは先輩の「何、唯乗

つてゐたかつたから。」という「言葉」自体を問題にしている章であり、内容に則した改変である。また、「七畫」の「彼は写真版の中にも鮮やかに浮かび上る色々を感じた。」から「彼は写真版の中にも鮮やかに浮かび上る自然を感じた。」の改変であるが、作品世界では直接でない「写真版」からも「自然を感じ」ていたことを示した章であり、「自然」なことが強調されている。さらに「八 火花」では「空中の火花だけは欲しいと思つた。つかまえたかつた。」から「凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。」に改変されている。「空中の」が消され、次に「凄まじい」が付け加えられ、最後「凄まじい空中の」へと改変されている。そのうへ「火花だけは欲しいと思つた」から「命と取り換へてもつかまへたかつた」と改変されており、「火花」の様子がより具体的に描写されるに伴い、手に入れた心音が強くなっている。そのうへ「九 死體」では死体の様子を「熟した杏」から「腐敗した杏」に改変され、作中の嗅覚の表現にも重なるが、不快さが強調され、創作のために死体を手に入れる思いの強さが描写されている。最後に「十三 先生の死」では「雨上がりの風は風の中に或停車場のプラットフォームを歩いてゐた。」から「彼は雨上がりの風の中に或停車場のプラットフォーム新しい停車場を歩いてゐた。」に改変されている。「新しい停車場」と、「新しい」が加えられ、電車を待つ彼の姿を、漱石の死による環境の変化によって「新しい」と描写され、岐路に立っている姿が目につかぶのである。また「プラットホームを往來した。」から「歓びに近い苦しみを感じた。」に大幅に改変されている。つまり、始めは知らせを受け取った様子を描写しているだけで、その時の感情までは描写されていないのである。

続いて女性に関することでも改変は見られる。「二十一 狂人の娘」では「後の人力車に乗つてゐた彼は少しも興奮を感じてゐない彼自身を怪みながら、前の人をここへ導いたものの何であるかを考へてゐた。」と原稿にあるが、「興奮を感じてゐない彼自身」を「このラン・デ・ブウに興味のないこと」、「前の人」を「彼自身」に改変している。考察でも述べたが、「前」、「後」の関係を気にしている。また、その証としてこの章は二台の人力車から始まることに重点が置かれており、最初原稿でも『狂人の娘』は「車は」から始まっているが、書き直され「二台の人力車は」になっている。「田舎道」については先述したが、「薄曇つた田舎道」から「人気のない曇天の田舎道」に変更されており、「田舎道」にも特別の意味をもたせていることが明らかである。さらに彼女のことを「元來頭の鈍い」から「動物的本能ばかり」と具体的に彼女の特徴を描写している。次に「二十七 スバル式訓練」でも考察したように、原稿では「そこへ幌をかけた人力車が一台、まっ直ぐに向うから進んで来た。」とあるが、「進んで来た。」はのちに「近づいて来た。」に改変されている。相手から自分へという方向性は大切な意味をもつものであろう。最後に「十八 月」の原稿では「今まで知らなかつた寂しさを感じた。」の箇所は「彼等は一意識もな

い間がらだつた。」の前にあるが、完成稿では後ろにある。おそらく、「一意識もない間がら」でないが括弧で補われていることから、「寂しさ」の大きさを強調するための移動だったのであろう。

(3) 特徴的な表現の再考察

「Ⅱ 作品全体の考察」の「(2) 特徴的表現の分析」で考察した「曇り」、「いつか」についても原稿での改変の跡を見てみたい。これらは「四 東京」の中で、「隅田川は日の光りに曇つてゐた。」から「隅田川はどんより曇つてゐた」と、曇り方が「どんより」になっており、考察したように、作中に「暗」の要素が盛り込まれている。「どんより」が示す心象風景こそが、のちに作り上げた作品世界であることが理解できる。また「江戸以来の向う島の桜に彼自身を見出し出してゐた」から「江戸以来の向う島の桜にいつか彼自身を見出し出してゐた」に改変されている。「いつか」という自分自身の意識を明確にすることのない言葉が加えられている。さらに「三十 雨」でも、「浜木綿の花はこの雨の中に次第に腐つて行くらしかつた。」と原稿にあるが、「次第に」が「いつか」に改変されており、考察したように「いつか」の表現へのこだわりであつたと考えられる。

次に「(4) 作品における『彼』の設定」と合わせて確認してみたい。「四十 嘘」の改変について順に挙げると次のようになる。

① 「彼の将来は薄暗かつた。何の希望も与へなかつた。」
② 「彼の将来は彼の目には日の暮のやうに何の希望も与へなかつた。」
③ 「彼の将来は少くとも彼には日の暮のやうに薄暗かつた。」

彼の将来のことを表現するのに「薄暗い」という言葉と関連付けられていることがわかる。また、「何の希望も与へなかつた。」という意識的な心情は消え、その分、象徴的ものになっている。そして、「彼の目」、「彼には」と言葉は変化し、自分自身の特別な視点が加わり、意識的に自分を語ろうとしていることがわかる。作品世界を見るだけでは、単に象徴的な描写であり明確には理解しにくいのが、原稿により、「薄暗い」とことと「希望」が関連付けられていることが理解できるのである。

続いて「彼」についてであるが、「彼の目」は、先ほどの「四 東京」の続きの「桜は長い堤の上に檻樓に近い花を盛り上やうに」から「花を盛つた桜は彼の目には一列の檻樓のやうに憂鬱だつた。」への改変でも明らかである。桜の咲いている様子を「檻樓に近い花を盛り上やうに」と間接的に描写しているが、改変によって「彼の目」が付け加えられ、直接的に「花を盛つた桜」が「憂鬱だつた」と見えている。花盛りな桜にも本来の良さを見出せない彼の特別な心情を読み取ることができる。

最後に「Ⅱ 作品全体の考察」の「(5) 序文の意味」で、先述した「僕の」の引用について、重要であることを再確認したい。「最後にこの原稿を」から「最後に僕のこの原稿を」に改変されている。また、「都会人と云ふ」から「都会人と云ふ僕の皮を」へと改変され、「云ふ」のあと「皮」を書こうとして「僕の」を入れている。このように「僕の」を入れ、「彼」と区別して、自分自身の事であることが強調されている。そして結果的には「僕」の使用は九回に及んでいる。これらの改変から見て、本文中の「彼」とは区別し、「僕」を明らかに強調していることがわかる。

以上のように原稿から完成稿への改変の足跡をたどることにより、これまでの小論の作品世界の考察をより明確にしてくれる。また、原稿と完成された作品を比較した時、改変するということは、完成された作品世界がそれだけ芥川の伝えようとする真実に近いということでもある。

おわりに

「或阿呆の一生」は、芥川文学の集大成である。従って多くの問題を内在した作品であり、それだけ一方からの考察ではなく、多くのアプローチによって作品を考察することが必要である。そこで、様々な視点からなるべく作品を多角的に捉えることを視野に置いて考察を試みてきた。結論を述べるにあたって、煩雑になっていると感じるため、繰り返しになるが、もう一度、考察順に明らかにしたことをまとめておきたい。

まず、「Ⅰ 各章の考察」では、作品全体を理解するために「(1) 内容別の分類」を試み、「(2) 内容別の考察」で述べたように、「①実母」の実母については、発狂の問題に触れながらも、実母のことだけを直接見つめるのではなく、狂人の中の一人として間接的に見ている。また、「②養父母・伯母」については、これまで多く触れられていなかったが、彼の結婚生活など、彼の生涯において影響を及ぼしており、決して幸せとは言えないが、複雑な心情を読み取ることができる。次に、「③女性関係」については、これまで語られたことはなかったが、関わりのあった女性について、隠すことなく自分の心情を明確にしており、どちらかといえば、隠しておきたいことを隠そうとはせず、積極的に自分のことをさらけ出そうとしている。それぞれの女性については、女性を象徴する表現が示すように、安らぎを与えてくれる女性から、嫌悪を感じている女性、知性的な女性、そして心中を考えた女性まで明らかにしている。さらに「④身近な出来事」では、起こった地震のこと、友人のこと、身内の不幸といった事実が表現されているが、不安や怒り、耐え忍ぶ心情を読み取ることができる。そして「⑤生活・病・死」では、自分自身、病氣、死についてま

で、起こった事実そのままを語り、それらを通した自分の体験についての心情が冷静に客観的に表現されている。そのうえ「⑥創作」では、章題に象徴されるように様々な視点から、芸術、創作への自分の考えなど、作家としての自分の心情を語っている。また「⑦人物」では、夏目漱石をはじめ、影響を受けた人物について、象徴的な描写により、師への想いや作家としての心情が読み取れる。さらに「⑧『或阿呆の一生』の執筆」では、自叙伝を書く意欲と困難、それに最後書き上げた満足感が語られている。最後「⑨人生観」は冒頭、収束部の二章である。冒頭は文学に価値を見出しながら、二十歳から始まる作家人生を回想する。また、収束部は、語ってきた各章を総括して、作家人生に終焉の自分の姿を綴っている。

このように内容別に九項目に分類し、論じてきた考察の結果、最終的に、「①実母」、「②養父母・伯母」は「家に関すること」、「③女性関係」は「女性に関すること」、「④身近な出来事」、「⑤生活・病・死」は「自分に関すること」、「⑥創作」、「⑦人物」、「⑧『或阿呆の一生』の執筆」、「⑨人生観」は「創作に関すること」の四つに大きくまとめることができるのである。これらの四項目に共通することは、自分のことを積極的に語っていることである。また、その内容は、先行研究を参考に考察させていただいた結果、概ね事実に沿っている。さらに表現方法は、比喻などによる象徴的な表現、表現に込められた繊細な深い心情、構築された作品構造を用いている。これらのことから、「告白」に比重を置いた、彼なりの事実の「告白」を目的として、「或阿呆の一生」が書かれたと考えられ、作家であることを意識した「告白」のように思うのである。

「Ⅱ 作品全体における考察」においては、各章だけの考察に限定するのではなく、作品世界全体を視野に入れ、全体的に捉えようと考察した。まず「(1) 特徴的な表現一覧表」を作成し、それを基に「(2) 特徴的な表現」を分析した。明らかにしたことは、作品全体に「薄暗い」という表現が見られ、またそれと関連するようには「光」に関する表現も見られた。これらの表現から「或阿呆の一生」の作品中には、人生を振り返った作品の「明」と「暗」を読み取ることができる。また、作品全体に嗅覚、植物、道などが作品世界の中で効果的に表現されている。「(3) 作品の構造」では、断章の集合帯のようなアフオリズムの形式のため、各章同士の繋がりがないと考えられるが、章題、配列、構成の面から、作品全体を意識して構成された作品であることがわかる。「(4) 作品における『彼』の設定」では、初めて「彼」を用いて、これまでの告白方法を一歩進めた方法であることを指摘し、さらに、「(5)『序文』の意味」では、「告白」するための芥川の工夫と方法を探り、「告白」をより可能にするための序文であることを明らかにした。

最後、「Ⅲ 改変の考察」において、「(1) 題名・章題の再考察」、「(2) 内容別の

再考察」、「(3) 特徴的な表現の再考察」の三つに分け、原稿から直接聞こえてくる芥川の声を聞くように努め、小論で考察してきたことを再確認し、実証的に捉えることを目的に考察した。

「或阿呆の一生」は「一生」でありながらも、自分の二十歳から三十五歳までのことが語られている。「二十歳」は芥川にとつて、東京帝国大学に在学し、作家としてスタートを切る時期である。それだけ芥川の「一生」が作家生活と深く結ばれていることを意味する。その語られた内容は、その年齢当時を回顧しながらも執筆当時の心境が基盤になっている。「或阿呆の一生」の作品世界は、久米正雄、関口氏が先に述べたように、誤字脱字などから考えれば、これまでのような構築された内容ではないという意見もある。しかし、「I 各章の考察」の(2) 内容別の考察」で述べたように、細部にわたる比喻や象徴的な表現、構築された作品構造など、芥川特有の表現方法は、これまで書かれた他の作品と同様に作品世界が存在していると考えられる。

また、久米正雄への依頼文や実際の文への遺書を見ると、死後のことについて、事細かに指示している。それは死後のことを考え、起こり得る不都合な事態を避けるかのである。萩原朔太郎は「実に彼は、死によつてその『芸術』を完成し、合せて彼の中の『詩人』を実証した」(「芥川龍之介の死」『改造』昭和二・九)と語っているが、遺書という形をとることによって、作家としての芥川の〈告白〉が完成した。つまり、「或阿呆の一生」は、芥川が死ぬことによって作品が完成する。言わば、死ぬことを前提として書かれている作品であることを忘れてはいけない。その意味からすれば、この自伝は生の終わった時点から回想され、書き始められた自伝なのである。死を前にして書かれた「或阿呆の一生」執筆の意義は、〈告白〉すること、ひいては〈告白〉しておかなければならないといった作家としての最後の使命を果たすことではなかったのだろうか。即ち、このように「或阿呆の一生」は、作家としてすべてを〈告白〉するための作品と考えるのである。

考察したように〈告白〉するための工夫は多く見られる。それは、自分のことを「或阿呆」という人物として設定することから始まり、作品世界における「いつの間にか」という表現、短文による断章からなるアフォリズムの形式、主人公の「彼」の設定、また、久米正雄への「序文」といった、これまでの芥川の作家活動についての創作方法をすべて駆使したといえ、まさに芥川文学の集大成として「或阿呆の一生」は執筆されている。「一生」という題名から、同じ人生を回顧したものとして、出生のことや生い立ちのことに触れた「半生」という作品名の「大導寺信輔の半生」が想起される。「或阿呆の一生」にも冒頭近くに「母」、「養父母」のことが描かれているが、明らかに「大導寺信輔の半生」の作品世界との相違を指摘すること

ができる。しかし、「或阿呆の一生」は、間違いなく「半生」を視野に入れ、「一生」を描いたはずである。これまでの「大導寺信輔の半生」が人間芥川の〈告白〉なら、「或阿呆の一生」は作家芥川の〈告白〉である。

「或阿呆の一生」の考察において、特筆すべきことは、本来〈告白〉しなくてもよいことまでも明らかにしている点において、他の作品の〈告白〉内容との相違を指摘することができる。なぜそこまで赤裸々に〈告白〉する必要があったのか。これまでの芥川なら決してそのようなことはしなかったであろう。〈告白〉をして芥川が得をするとは何もない。強いて言えば、「阿呆」であることが証明され、より多くの人に自分が「阿呆」であることを知らしめるだけである。しかし、自分の人生の最後を飾る作品として、そこまで自分が「阿呆」になり切る必要はどこにあったのか。これについて考えていくと、作家芥川を意識したうえでの〈告白〉としか考えられないのである。女性関係をはじめ、本来なら〈告白〉したくない内容まで〈告白〉している。このことはこの作品が、自分に都合の良いことを〈告白〉するのではなく、自分に起こったことをすべて〈告白〉していることの証でもある。主人公のことを「或阿呆」と位置づけることによって、すべてなりふり構わず〈告白〉することを可能にしているのである。『或阿呆の一生』は、〈彼〉すなわち「阿呆」と蔑称される人物の『敗北』への行程を、象徴的手法で描いたものと言えよう。(中略) その告白の度合いは深く、一個人の問題を越え普遍化され、同時代人共通の課題へと昇華するのである。」(関口安義氏・庄司達也氏編『芥川龍之介全作品辞典』勉強出版、平成一二・六、三三頁)としながらも、史実の考察においては「芥川はまだすべてを告白していない。」ことが通説化されている。

〈告白〉について問題にする限りは、史実に触れずに論ずることは難しい。しかし、「はじめに」でも述べたように、作品における表現方法にこだわり、なぜそのように表現しなければならなかったのかという表現自体の意味を優先すべきである。作品中に語られていることのすべてを、真実か否かを明らかにすることはできない。もし、可能だとしても、それは芥川の意に反するようにも思える。芥川の言うところの「詩と真実」を書こうとしたという心情を大切にし、それ以上のことは追究しなくてもよいのではないだろうか。すべてを〈告白〉しているか否かが問題ではない。作家芥川がその史実をどのように表現しているか、そのように表現する意味とは何か、が大切である。また、これまで「大導寺信輔の半生」のように、嘘によるしか表現できない真実もあると言いながら、人間芥川が作家として自分をさらけ出し、自分を語ろうという意思を感じられるだけで、芥川の〈告白〉は完結している気がする。即ち、「或阿呆の一生」は、芥川特有の表現方法によって、芥川自身の真実を語ろうとした作家芥川の〈告白〉となり得るのではないだろうか。

注

- (1) 本稿における引用は、岩波版『芥川龍之介全集』(平成七・一一・八〜平成一〇・三・二七)に拠る。但し、適宜、現在通用の字体に改めたものもある。
- (2) 「或阿呆の一生」の研究については、作品全体を視野に入れた作品論としての考察は他の作品に比べて少ない。テーマ別及び各章に特化したものが多い。例えば、女性関係について論じた、宮城達郎氏「芥川龍之介論ノート」『或阿呆の一生』を通してみた女性観——『明治大学 教養論集』昭和四五・四)、各章に特化した、菊池弘氏「芥川龍之介——『或阿呆の一生』三十四 色彩(読む)——」『日本文学』昭和五六・三)などがある。さらに、晩年の作品との関連の考察には、宮坂覺氏「『或阿呆の一生』試論—改題と『西方の人』執筆との関わりを中心に——」(『信州白樺』第四七・四八合併号、昭和五七・二)、を始め、天満尚仁氏「芥川龍之介における“語り得ぬもの”——『羅生門』と『或阿呆の一生』を架橋するもの——」『立教大学日本文学』一一〇号、平成二五・七)、奥野久美子氏「芥川龍之介『好色』の自画像——『大導寺信輔の半生』『或阿呆の一生』への道——」『京都教育大学国文学会誌』四一号、平成二六・七)などがある。また、史実に関する研究については、兼定明日美氏「芥川龍之介『或阿呆の一生』究——史実との比較を中心に——」『富大比較文学』平成二八・二)がある。
- (3) 「内容別の分類」について、例えば、「十二軍港」には、この章だけは「先生」という描写はないが、夏目漱石について語った「十先生」、「十一夜明け」、「十三先生の死」の間に配列されている。よって「⑦人物 1 夏目漱石」に分類することも可能であるが、内容的に自分の置かれている状況を「小さなもの」と認識していることは明らかなため、漱石ではなく、「⑥創作」に分類した。また、「二十五ストリントベリイ」は、『痴人の告白』についても触れており、「⑦人物 3 西洋人」に入れることも可能であるが、自らの創作態度を示していると考えられるので、「⑥創作」に分類した。さらに、「四十一病」には「モーツアルト」として描写されており、「⑦人物 3 西洋人」に分類することもできる。「しかししもや彼のやうに」とあるが、ここでの「彼のやうに」は、モーツアルトではない。この章では、モーツアルトは例に過ぎず、モーツアルトの影響よりも、病による彼の苦しみに重点が置かれていると考えて、「⑤生活・病・死」に分類した。その他、分類については、どちらにも分類できるものなど、分類の仕方には相違が生じる可能性があることを断っておく。

- (4) 自筆原稿については、草稿として山梨県立文学館編『芥川龍之介資料集 図版 1』(平成五・一一・三、山梨県立文学館 三三一〜三五四頁に収められている。また、確認のため当館所有の原稿を何度も閲覧させていただいた。快く承諾していただいた山梨県立文学館には、記して感謝申し上げる。
- 親友の久米正雄に原稿を託しているが、同じ作家として原稿を發表しないという選択はあり得ないように思う。特に二人の関係が親密であればあるほど、そこにある二人の信頼関係からは、想像できない。原稿の改変の形跡については、後に考察するが、参考までに「十六枕」の「アナトオル・フランスの本を読んでみた。が、いつかその枕の中にも半身半馬神のあることには気づかなかつた。」(傍線引用者)を例に挙げる。文中の「が」は原稿によると、芥川は消しているように思えるが、久米は残している。
- (5) 史実の確認については、『芥川龍之介全集』第二四卷(平成一〇・三・二七、岩波書店)の年譜を参考にさせていただいた。
- (6) 『日本近代文学館』館報三二八号(令和六・三・一五)に「芥川龍之介旧蔵書から押し花二点が発見された。(中略) マツヨイグサの花言葉は『ほのかな恋』『ウイキョウ』は『賞賛に値する』。芥川はどのような想いを押し花に託したのだろうか。」(澤西祐典氏『赤い百合』と押し花 六・七頁)と掲載された。また、『日本経済新聞』(令和六・四・二二、夕刊)で「芥川、花言葉で恋伝える?」という表題で「作家、芥川龍之介は繊細なロマンチストだった——? 芥川の蔵書の中から『ほのかな恋』を意味する花言葉を持つ押し花が見つかったことが12日までに、日本近代文学館(東京・目黒)への取材で分かった。」と報じられた。さらにこのことはNHKのニュースでも報道された。
- 「或阿呆の一生」には、多くの植物が登場する。明治四十五年頃、西洋から「花言葉」が日本に伝えられ、大いに流行したという。『芥川龍之介自筆未定稿圖譜』(角田忠蔵氏編纂・解説、昭和四六・九・一〇、大門出版美術出版部、二〇八、二〇九頁)に「小中学時代の作品その1」がある。その中には「この『花占ひ』は他書からの抜書らしく、花言葉によって他人の性質などを占う遊戯である。」との解説があり、芥川自筆のメモが掲載されている。当時、出版された物として「花ことば」(田寺寛二氏著、明治四二・五・三〇、良明堂書店)があるが、その中に芥川が抜書したものと同じ花がある。芥川はメモで例を示すと「水仙 大胆な性質の人」、「榊 農夫」、「ぢきたりす 法律家」、「金盞花 商人」などである。このことから、実際に参照したと考えられる。
- 作品中の植物「黄水仙」であるが、『花ことば』には「きずあせん」(八三・八四頁)の花言葉が「余は愛情の歸來を希望すとの意あり。」とある。花言葉通り「愛

情の復権」を意味すると考えると、「十八結婚」において相通じるものがある。花言葉への興味を確認するため、日本近代文学館の芥川の蔵書を調べたが、残念ながら見つめることはできなかった。しかし、以上のように、花言葉の伝わった時期、そして愛蔵書から見つかった押し花、花言葉の由来がギリシャ神話であることから考えれば、外国文学に精通する芥川が、「或阿呆の一生」の作品中で、その状況に関連する花言葉をもつ植物が使われていてもおかしくないと思われる。このような理由から小論でも植物については花言葉を紹介する。花言葉の出典は『世界花言葉全集』（昭和五・一一・一五、春陽堂）に拠る。

なお植物の考察にしては、西川正三氏「芥川龍之介の植物世界——感応する植物・植物への変容」（『慶應義塾大学日吉紀要（英語英米文学）』（平成二四・三）に詳しい。

(7) 作品中の色覚については、作品世界が「薄暗い」こともあり、「火花」、「煙草の火」などの「火」にまつわるものは特筆されているが、あまり多いとは思われない。しかし、実母が「鼠色の服を着せられてゐた。」とあり、生まれてくる子供に「鼠の仔の匂い」を感じていることから、「鼠」には意味があると考えられる。特別な根拠はないが、例えば、「鼠色」は、白色、黒色の混合色であり、言わば、はつきりしないことの例えの「白黒がつかない」という言葉が示す通り、そのことが具体化した色でもある。作品世界の「薄暗い」に象徴されるように、狂人たちにとって、自らの意思ではなく、理由がわからぬまま狂人になってしまい、その原因すらわからないことを暗示していると考えられる。

なお、芥川の色覚については、上村和美氏の『文学作品にみる色彩表現分析 芥川龍之介作品への適用』（平成一一・六・二八、双文社出版）の中で、「白」と「黒」を対比している。「厳肅さを表す『白』」、「嫌悪の色『黒』」と指摘しており、「黄」は「死への傾斜を意味する『黄』」として、「四十九剥製の白鳥」の『黄ばむ』』という表現は、語そのものがマイナスの意味を持つ」と述べており興味深い。

(8) 光と闇については、相原和邦氏『或阿呆の一生』論—芥川の〈光〉と〈闇〉—（『國文學』平成四・二）の指摘がある。大方私の見解も同意見である。特に感銘を受けたのは、「鼻」を激賞した漱石の書簡（大正五年八月二十一日付）から三日後の二十四日付の書簡「あせつては不可せん。頭を悪くしては不可せん。根気づくでお出でなさい。世の中は根気の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか与へて呉れません。」の箇所に触れての考察である。「芥川の資質を洞察したうえでの助言であり、〈予言〉なのである。それだけに、〈根気〉を主張し、〈火花〉を懸念する漱石の警告は、鋭く的確である。かがやかしい青春の記念としての漱石のこの書簡と言葉とを芥川が忘れるはずはない。

『或阿呆の一生』で、『八火花』の二節後に、『十先生』が来る構成から見ても、作者は十分に意識的である。しかし、書簡を手にしてから十一年後、一九二七年の死を前にした芥川は、〈根気も尽きた事実を認めるとともに、なお、敢えて〈火花〉の美を主張し、〈命と取り換へても〉と言い切る。ここには、漱石の忠告を生かし得なかったことへの悔恨と同時に、忠告に抗して〈火花〉に命を賭する覚悟が宣言されている。この挿話には漱石とは違つた芥川の人間と文学の特質、——その栄光と悲劇とが如実に結晶しているわけである。——と述べている。

(9) 作品中には「いつか」（十二例）、「いつの間か」（二例）、「いつの間にか」（三例）の他、「何か」（十四例）、「何の」（四例）、「何（なに）」（三例）、「何も」（三例）、「何ごと」（二例）、「なぜ」（二例）、「なぜか」（二例）、「どこ」（三例）、「妙に」（四例）などの疑問、曖昧な表現が多く見られる。

——令和七年三月七日稿了——

“On Ryunosuke Akutagawa's “A Fool's Life”: A Confession as a Writer”

Haruki ISHITANI

Ryunosuke Akutagawa's "A Fool's Life" is his last work, written shortly before his death, and is considered the culmination of Akutagawa's literature. Therefore, it evokes many problems inherent in the work, and it is necessary to interpret the work from various approaches rather than from a single perspective. Therefore, I have tried to explore the interpretation of the work from a variety of perspectives.

As a result, "A Fool's Life" is interpreted as a "confession" that makes full use of all of Akutagawa's past creative methods. It is not only a "confession" as an individual, but a work in which Akutagawa exposes himself without lying, while being aware that he is a writer. In other words, the work implies "confession" in order to emphasize being a writer.

Key words : 芥川龍之介・或阿呆の一生・作家・告白

編 集

図書館長 図書・文化委員長

図書・文化委員

〃

〃

〃

〃

〃

〃

伊藤 明 (電子情報工学科)

久留原昌宏 (教 養 教 育 科)

石谷 春樹 (教 養 教 育 科)

長谷川賢二 (機 械 工 学 科)

山田伊智子 (電気電子工学科)

今田 一姫 (生物応用化学科)

黒飛 紀美 (材 料 工 学 科)

高倉 良男 (学 生 課 長)

Chief Editor

Akira ITO Dept. of Electronic and Information Engineering

Editors

Masahiro KURUHARA Dept. of General Education

Haruki ISHITANI Dept. of General Education

Kenji HASEGAWA Dept. of Mechanical Engineering

Ichiko YAMADA Dept. of Electrical and Electronic Engineering

Kazuki IMADA Dept. of Chemistry and Biochemistry

Kimi KUROTOBI Dept. of Materials Science and Engineering

Yoshio TAKAKURA Student Section Manager

本校紀要は全国の国公立私立大学・短期大学・高等専門学校・
各種研究機関所属者の複数名による外部査読を受けています。

独立行政法人国立高等専門学校機構

鈴鹿工業高等専門学校紀要 第57巻

MEMOIRS of National Institute of Technology, Suzuka College
Vol. 57

発 行
発行者

令和7年3月31日
独立行政法人国立高等専門学校機構
鈴鹿工業高等専門学校
三重県鈴鹿市白子町
〒510-0294
TEL 059-386-1031
FAX 059-387-0338

Published March 31, 2025
by National Institute of Technology, Suzuka College
Shiroko, Suzuka, Mie 510-0294, Japan

ISSN 2760-3652